

グリム童話と『日本の昔ばなし』の比較

— 難題解決結婚について —

Ein Vergleich der Märchen der Brüder Grimm mit den japanischen Märchen über die Heirat zur Belohnung für die Lösung schwieriger Aufgaben

太田伸広

要旨 難題解決結婚の話进行分析すると、幾つかの特徴が現われる。それを一般的に定式化すると、難題解決結婚とは、王様（女王、王女）が、地上の人間には解決することがおよそ不可能な難題を出し、それを解決したら、褒美としてお姫様（王子）をやる（嫁にする）という約束に基づく結婚である。難題解決には、異界の存在や贈物が登場し、難題解決に決定的な役割を演ずる。主人公はほとんど行動しない。褒美としての（主として）お姫様は家父長的な父王からモノ扱いされる。しかし、それにもかかわらず、お姫様には結婚に抗う強い意志や激しい感情を持つ人が多い。不思議なことに、『日本の昔ばなし』にはこの難題解決結婚は一話もない。グリム童話といえども、庶民同士の難題解決結婚はない。

はじめに

グリム童話と『日本の昔ばなし』を難題解決結婚に焦点を当てて比較する。分析の対象は、グリム童話の場合は、1857年の決定版のKHM 200篇、203話で、日本の昔話の場合は、関敬吾氏編集の『日本の昔ばなし』（岩波文庫）第I、第II、第III巻の240話である。

結婚は、その種類と類型の両面から分析することにする。種類とは、恋愛結婚、難題解決結婚、魔法からの解放結婚、政略結婚、等々である。類型であるが、異なる結婚、例えば、恋愛結婚と難題解決結婚であっても、王家（殿様家）の男と王家（殿様家）の女の結婚ということでは同じ型の結婚であり、それを結婚の類型と呼ぶことにする。王家（殿様家、高貴な身分）の男と王家（殿様家、高貴な身分）の女の結婚を類型1、王家（殿様家）の男と庶民の女の結婚を類型2、庶民の男と王家（殿様家）の女の結婚を類型3、庶民同士の結婚を類型4とする。

「難題」とは、ガラスの斧で森のすべての木を一日で伐採するとか、部屋一杯の薬を一晩で金の糸に紡ぐというように、およそ人間がやり遂げることが不可能か、不可能に近い課題である。謎解きのような課題は、単なる課題で、結婚の「条件」であり、ここで言う「難題」とは種類が違う。そして難題を解決して花嫁や花婿をもらうことになるのが難題解決結婚である。

そうすると、グリム童話には、難題解決結婚は13篇、13組あり、恋愛結婚の21篇、23組、魔法からの解放結婚の13篇、15組について、第3位を占め、比較的好くあるメルヘンと言える。ところが、『日本の昔ばなし』には、難題解決結婚は一つもない。この事実そのものが驚きであると同時に興味深い。これから、グリム童話の難題解決結婚を類型別に具体的に見ていくことにする。グリム童話に見られる難題解決結婚は類型1、類型2、類型3であり、類型4

はない。

グリム童話のテキストは、BRÜDER GRIMM Kinder- und Hausmärchen Vollständige Ausgabe Mit 184 Illustrationen zeitgenössischer Künstler und einem Nachwort von Heinz Rölleke Artemis & Winkler 1949 Winkler Verlag, München, 19. Auflage 1999 である。参考にした訳は、金田鬼一氏の『グリム童話集』（岩波書店）である。

第1章 類型1の難題解決結婚

最初は『黄金の鳥 (Der goldene Vogel)』（KHM 57）である。

王様の庭に黄金のりんごのなる木が一本あった。朝になるとりんごが一つなくなるので、王様は、三人の王子に寝ずに番をするように命じた。長男も次男も寝てしまったが、一番信用されていなかった末っ子は、真夜中も起きており、りんごを食いちぎった黄金の鳥に矢を放った。矢は羽をかすめ、羽が一枚落ちてきた。それを拾って王様のところへ持って行った。すると、王様は息子たちに鳥を丸ごと捕ってくるように言った。黄金の鳥を探しに出かけた長男と次男は、途中で出くわした狐の願いと忠告に耳を貸さず、失敗した。

末っ子は、兄さんと違い、命乞いをする狐を鉄砲で撃たなかった。すると、狐は末の王子を尻尾に乗せ、黄金の鳥のいるお城へ連れて行って、木の籠に入った黄金の鳥を金の鳥籠に入れ替えないように忠告した。しかし、末っ子は黄金の鳥を金の鳥籠に入れ替えたため、鳥が鳴き、捕まって牢屋へ入れられた。王様は死刑を宣告したが、黄金の馬を持って来るならば命は助けてやると言った。

王子が途方に暮れていると、また狐が王子を黄金の馬のいるお城へ連れて行ってくれた。今度も王子は狐の忠告を守らず、黄金の馬に金の鞍を乗せた。すると馬がいなくなき、王子は捕まって死刑を宣告された。しかし王様は、黄金の城の美しいお姫様を連れてくるならば、命を助けてやるし、黄金の馬もやると言った。

王子は悲嘆に暮れ旅に出た。すると、例の狐が現れ、王子を尻尾に乗せて黄金の城に連れて行った。今回も王子は狐の忠告を守らず、捕まって牢屋へ入れられた。翌朝、王様は「お前の命はないと思え。だがな、わしの窓の前に山があって、その向こうが見渡せぬ。お前がその山を取り除くならば、命を助けてやろう。だが、八日以内にやり遂げねばならぬぞ。これが首尾よくいったなら、わしの娘を褒美としてお前にやろう。‘dein Leben ist verwirkt, und du kannst bloß Gnade finden, wenn du den Berg abträgt, der vor meinen Fenstern liegt, und über welchen ich nicht hinaussehen kann, und das muß du binnen acht Tagen zustande bringen. Gelingt dir das, so sollst du meine Tochter zur Belohnung haben.’」と言った。

王子は難題に取りかかったが、絶望的になった。ところが、七日目になると、あの狐が現れ、王子が寝ている間に、山をすべて取り除いてしまった。そして王子は黄金の城のお姫様をもらうことになった。王子は狐の忠告に従い、お姫様と黄金の馬と黄金の鳥を手にして帰路に着いた。しかし、ここでも狐は「絞首台の肉を買ってははいけません。また、井戸の縁に座ってもはいけませんよ。」と忠告をしてくれた。

王子が馬に乗ってお姫様と一緒にお城へ帰る途中、兄二人が悪事を働き、絞首刑にされるころであった。弟は身代金を払い、兄二人を救い、一緒に帰ることになった。途中で、兄二人が井戸のそばで少し休憩しようといったので、弟が井戸の縁へ腰をかけると、二人は弟を井戸の中へ突き落とし、お姫様と馬と鳥を奪い、父王のお城へ帰っていった。

二人の兄は、お城に戻ると「このように、私どもが持って帰りましたものは、黄金の鳥だけではありません。黄金の馬と黄金の城の乙女も生け捕りにしてきました。‘Da bringen wir nicht bloß den goldenen Vogel,’ ‘wir haben auch das goldene Pferd und die Jungfrau von dem goldenen Schlosse erbeutet.’」と言った。「すると、大きな喜びが沸き起こった。けれども、馬はというと何も食わず、鳥はというとさえずらず、乙女はというと座って泣いていた。Da war große Freude, aber das Pferd, das fraß nicht, der Vogel, der piff nicht, und die Jungfrau, die saß und weinte.」

井戸に落とされた弟は、幸運にも井戸は涸れていたし、苔の上に落ちたので、怪我もしなかった。王子が困っていると、また狐が現れ、王子を井戸から引き上げてくれた。王子は狐の忠告を守り、みすばらしい衣服を着てお城へ帰った。「誰も王子とは気づかなかったが、鳥はさえずり始めたし、馬も食べ始めた。そして美しい乙女も泣くのをやめた。Niemand erkannte ihn, aber der Vogel fing an zu pfeifen, das Pferd fing an zu fressen, und die schöne Jungfrau hörte Weinens auf.」驚いた王様が乙女に訳を尋ねると、乙女はこれまでのいきさつをすべて王様に話した。「神をも恐れぬ兄たちは捕らえられ、処刑された。そして末の王子は美しい乙女と結婚し、王様の跡取りに決まった。Die gottlosen Brüder wurden ergriffen und hingerichtet, er aber ward mit der schönen Jungfrau vermählt und zum Erben des Königs bestimmt.」

結婚後王子が森へ行くと、例の狐が現れ、「私を撃ち殺して、私の首と前脚をちょん切って下さい。abermals bat er flehentlich, er möchte ihn totschießen und ihm Kopf und Pfoten abhauen.」と懇願した。王子がそうすると、狐は人間の姿に戻った。彼はお姫様の兄であった。魔法が解けたのである。

末の王子とお姫様の結婚の種類は、次のような王様の言葉でよくわかる。「お前の命はないと思え。だがな、わしの窓の前に山があって、その向こうが見渡せぬ。お前がその山を取り除くならば、命を助けてやろう。だが、八日以内にやり遂げねばならぬぞ。これが首尾よくいったなら、わしの娘を褒美としてお前にやろう。」王子自身は絶望的になり、何もできなかった。しかし、狐が一晩で山を跡形もなく片付けてくれたので、お姫様をもらうことができた。したがって、二人の結婚は典型的な難題解決結婚である。

王子のお姫様に対する気持ちは語られておらず、わからない。王子はお姫様が欲しくて、命を賭け、難題に立ち向かったのではない。逆である。命惜しさから、死への恐怖から、やむをえず、言われるがままに行動したに過ぎない。その場その場で、死ぬ運命から逃れようと振舞っただけである。黄金の城の美しいお姫様を手に入れるのは、黄金の馬を手に入れるためであり、黄金の馬を手に入れるのは、黄金の鳥を手に入れるためだったに過ぎない。それだからか、美しいお姫様をもらうことになっても、喜びの気持ちを一切表さない。Der Jüngling eilte vor Freude zum König und meldete ihm, daß die Bedingung erfüllt wäre,と喜んでいるのは、難題をやり遂げることができず、, so fiel er in große Traurigkeit und gab alle Hoffnung auf. と、絶望し、死を免れることができなかった状況から脱却できたからである。

お姫様の方は王子をどう思っているのでしょうか。お姫様の気持ちがあらわれている箇所は、次のところである。夫となる末の王子が兄二人によって井戸に突き落とされ、彼らによって城へ連れて行かれた時である。「乙女はというと座って泣いていた。」この涙の意味は、実ははっきりしない。恐らく夫となる末の王子が殺されたと思い、悲しさのあまり、泣いているのであろう。しかし、悪事を働いた兄たちが自分たちの手柄として父王に報告している虚偽と、自分

が本当のことを言えば殺されるという事態への悔しさもあるかも知れない。あるいは、その両方の涙かも知れない。しかし、王子を思う悲しみの涙とは言っても、それは愛する人を失った悲しみ、つまり愛情の裏返しの悲しみの涙ではなかろう。父王がやると約束した正当な結婚相手がこの世になくなった悲しみの涙であろう。これでも読み込み過ぎかもしれない。むしろ、結婚の正当性がないばかりか、夫となるべき人を殺した殺人鬼と結婚しなければならないという悔し涙の側面の方が強いであろう。というのも、このお姫様の振舞いは、馬と鳥の反応に続くものだからである。「すると、大きな喜びが沸き起こった。けれども、馬はというと何も食わず、鳥はというとさええず、乙女はというと座って泣いていた。」これで明らかのように、もともと王子と何の関係もなかった馬と鳥が反抗的な態度を示しているのは、正規の手続きを踏んで馬と鳥を手に入れた王子を彼らが主人とみなしており、手柄を横取りした悪者の兄たちを憎んでいるからである。お姫様もこの延長線上にある。ただ、お姫様が人間であり、王子と結婚することになっている点が少し違うだけである。お姫様の気持ちがあらわれた箇所がもう一つある。末の王子が乞食に変装して城に帰ってきた時のことである。「鳥はさええずり始めたし、馬も食べ始めた。そして美しい乙女も泣くのをやめた。」そしてお姫様は言う。「私はとても悲しかったのですが、今はとても嬉しいのです。私の正当の花婿様がお越しになられたような気が致します。 , aber ich war so traurig, und nun bin ich so fröhlich. Es ist mir, als wäre mein rechter Bräutigam gekommen.」この後、お姫様は兄たちの悪事を暴露する。この場面におけるお姫様の喜びは、父王の決めた「正当の花婿様」を迎えたことへの喜びである。ここでは、王子への愛情云々は問題ではない。そもそも、お姫様は自分の意思や気持ちで王子に嫁ぐことになったのではない。お姫様は、父王の出した難題を王子が解決したことへの「褒美」として、王子に与えられただけなのである。お姫様は、まったく家父長的な父に、その約束に忠実に従っただけのことである。王子に対する愛情があるかどうかわからない叙述になっているのもそのせいである。先ほどの悲しさとここでの喜びは同一の感情の裏表である。

末の王子は難題を解決し、美しいお姫様と結婚したが、王子自身が難題を解決したわけではない。王子は難題に取り組むには取り組んだが、絶望的となっていた。七日目になって、狐が現れ、王子が寝ている間に、苦もなく山を取り除いてしまった。王子はというと、あくる朝に目を覚まして、山が影も形もないのを見つけて喜んだだけである。このように、難題を解決したのは主人公ではなく、狐という異次元の世界の存在である。お姫様だけでなく、黄金の馬、黄金の鳥を手に入れることができたのも、狐のお陰であり、王子が井戸の底から救われ、番兵に殺されず無事に父王の城に帰って、お姫様と結婚できたのも、狐のお陰である。

次は『二人の王様の子供 (De beiden Künigeskinner)』(KHM 113)である。

「むかし昔王様があり、男の子が一人いた。その子は、十六歳になったら鹿に殺されるという兆候が出ていた。Et was mol en König west, de hadde en kleinen Jungen kregen, in den sin Teiken hadde stahn, he sull von einen Hirsch ümmebracht weren, wenn he sestein Jahr alt wäre.」ある日、王子は狩に出かけた。森に入って鹿を追いかけっていると、いつのまにか、鹿ではなく大きな男の人が立っていた。男は王子を捕まえ、ある大きな城へ連れて行った。

大男の王様は、今晚寝ずに長女の番をせよ、わしが行ったときに返事をしなければ、朝にはお前の命はない、しかしわしが行った時にいつも返事をしたら、娘を嫁にやる wenn du mie dann kine Antwort givst, so werst du morgen ümmebracht, wenn du awerst mie immer Antwort givst, so salst du se tor Frugge hewen.、と言った。王子とお姫様が寝室に行くと、お姫様は

「石のクリストッフエル像 (de steinerne Christoffel)」に王子の代わりに返事をして頂戴と頼んだ。王様がやってきた時、王子は寝ていたが、石の像が返事をしてくれた。

翌朝、王様は王子に、うまくやったがまだ娘はやらぬ、今晚は次女を寝ずに番をせよ、返事がなければ命はないぞ、お前に長女をやる資格があるか見る、と言った。次女ももっと大きな石のクリストッフエル像に頼んだ。そこで、王子はぐっすり寝た。

翌朝、王様は王子に、うまくやったがまだ娘はやらぬ、今晚は末の娘を寝ずに番をせよ、返事がなければ命はないぞ、今度はお前に次女をやる資格があるか見る、と言った。末の娘もさらに大きな石のクリストッフエル像に頼んでくれ、王子はただぐっすり寝ていただけであった。

翌朝、王様は、まだわしの娘はやらぬ、森の木を今日中に全部切り倒せ、そうすれば考えてみる、と言って、王子にガラスのまさかり (en gleserne Exe) とガラスのくさび (en glesernen Kiel) とガラスのつるはし (en gleserne Holthacke) を渡した。王子は今度こそはもう命はないと思い、座って泣いていた。ところが、お弁当を持ってきた末のお姫様が、王子が寝ている間に「アルヴェッガース出て来て！ Arweggers, herut!」と言って、沢山の地妖を呼び出した。地妖たちは三時間で森の木を全部伐り倒し、伐った木を山に積んだ。そしてお姫様が「アルヴェッガース、家にお帰り！ Arweggers, nah Hus!」と言うと、地妖たちはあっという間に姿を消した。

王様はこれでも承知せず、一日で大きな池 (so en grot Dieck) のかえぼりをせよと言って、ガラスのシャベル (ene gleserne Schute) を渡した。王子は絶望的になった。すると、お弁当を持ってきたお姫様がまた地妖たちを呼び出した。地妖たちは二時間で池のかえぼり済ませ、すぐに姿を消した。

ところが、王様はこれでも承知せず、山の茨の藪 (Dorenbuske) を全部刈り取り、そこに大きな城 (en grot Schlott) を一日で建てろ、と言い、王子にガラスのまさかりとガラスの錐 (en glesernen Exen, un en glesernen Boren) を渡した。王子はまたも絶望した。しかし、今度もお姫様が呼び出した地妖たちが、王子が寝ている間に仕事を片付けてくれた。目が覚めた王子は、喜んでお姫様と一緒にお城へ帰って行った。

ところが、王様は「二人の姉が結婚するまでは、決して末の娘をやる訳にはいかない。‘mine jungeste Dochter kann ik nie giewen, befur de twei öllesten frigget het.’」と言った。「このため、王子と王女はまったく意気消沈してしまった。そして王子はどうしたらよいのかまったく途方に暮れてしまった。Do wor de Königssuhn un de Königsdochter gans bedröwet, un de Königssuhn wuste sik gar nig to bergen.」晩になって、王子は末のお姫様を連れて逃げ出した。父王に追いかけられ、連れ戻されそうになったお姫様は、王子を茨の藪 (Dörenbusk) に、自分を薔薇 (Rose) に変身させたり、また次には王子を教会 (Kerke) に、自分を牧師 (Pastoer) に変身させたりしながら、追跡から逃れた。今度は変身の術を知っていると思われる母君が追いかけてきた。困難を覚悟したお姫様は今度は王子を池 (Dieck) に、自分を魚 (Fisk) に変身させた。母君は、池の水を飲み干して魚を捕まえようとしたが、気分が悪くなり、嘔吐して、失敗した。母君は、娘がまた帰ってくるかもしれないと思い、胡桃 (Wallnutte) を三個やった。

こうして王子とお姫様は追跡から逃れ、王子のお城のそばまでやってきた。王子は、馬車で迎えに来るからここで待っていてくれ、とお姫様に言い、城へ帰って行った。ところが、王子は母親に口づけをされると、すべてのことを忘れてしまった。お姫様は仕方なく、お城の製粉

所 (de Muhle) に雇ってもらった。そのうち、王子がお嫁さんをもらうことになった。お姫様は、胡桃の中の立派な衣装 (en wacker Kleid) を着て、見物に出かけた。衣装を欲しがらる花嫁に、お姫様は、王子の部屋の戸の外に寝かせてもらうという条件で、衣装を差し上げた。部屋の外で、お姫様は泣きながらこれまでのことをすべて打ち明けたが、眠り薬を飲まされていた王子には何の効き目もなかった。あくる日も、お姫様は、花嫁にもっと美しい衣装を差し上げて、王子の部屋の外に寝かせてもらって、これまでのいきさつを泣きながら訴えた。今度は、花嫁の命令に逆らった家来が王子に目覚まし薬を飲ませていたので、王子はお姫様の訴えがわかり、謝罪した。そしてお姫様は、三つ目の胡桃の最も立派な衣装を着て、王子と馬車に乗り、教会へ行って結婚式を挙げた。

さて、二人の結婚であるが、分類は少々厄介である。王子が、長女、次女、三女の寝ずの番をするという課題に取り組んだのは、お姫様の誰かをお嫁さんにもらえるからではなく、それをやらなければ命を取られるからであった。つまり、王子を行動へ駆り立てたのは、死への恐怖であった。ガラスの道具で、一日で森の木を根こそぎ伐り倒すことや、一日で池のかえぼりをするという難題も、王子は死への恐怖からやむなく取り組んだのである。お姫様をもらえるという動機はない。ましてや愛情などない。一日で山の藪を刈り取り、大きな城を建てるといふ三つ目の難題に取り組んだのも同じ事情からであった。しかし、ここに来て、王子の様子が少し違う。それまでは、難題を解決するためのガラスの道具が壊れると、王子は意気消沈し (bedröwet)、「首がなくなる he sull sienen Kopp wohl mißen mutten」と嘆いていた。しかし、ここでは意気消沈してはいるが、死の恐怖を抱いていない。それどころか、お姫様が救ってくれることを期待している。そして突如として、お姫様が彼の最愛の人 (sine Leiweste) と語られる。これまでも、王子は難題を解決してもらおうと大喜びをしているが、今回は「空の鳥のように喜んで do was he so frau ase en Vugel in der Luft.」いる。しかも、難題解決後、それまでは別々に帰っていたのに、今回は「二人一緒に家に帰った。do giengen se tohaupe nah Hus.」王子の喜びの度合いが違うこと、二人が行動をともにしていることからして、死を免れた従来王子の喜びに、末のお姫様と結婚できるという喜びが初めて加わったことがわかる。お姫様も、父王に結婚を拒否されると、王子と同様に意気消沈してしまう。Do wor de Königssuhn un de Königsdochter gans bedröwet, そしてとうとう王子は晩にお姫様を連れて逃げ出す。駆け落ちである。これを境にお姫様の行動はより積極性を帯び、王子と自分を変身させ、父と母の追跡を逃れ、紆余曲折を経て最後はめでたく結婚となる。

このように、王子と末のお姫様の間には、難題を解決する過程で芽生えた恋愛感情がある。難題解決結婚の恋愛結婚への移行である。それゆえ、最後の方だけ、結論だけを見ると、二人の結婚は恋愛結婚であるが、全体の脈絡を見ると、二人が難題を解決した上で辿り着いた結婚である。最後の難題を王子が解決した後に、父王が娘をやるという約束を守らなかっただけである。二人は約束を実行に移したままである。それに、父王の言葉「二人の姉が結婚するまでは、決して末の娘をやる訳にはいかない。」は、よく考えると、二人の結婚を認めなかったのではなく、姉二人が結婚するまで、二人の結婚は駄目だ、それまで結婚を待て、ということである。つまり、結婚は認めているが、結婚に条件をつけたのである。時の条件を。ところが、二人はその条件を飲めなかった。姉二人が結婚するまで待てなかったのである。こういう意味の駆け落ちである。これは事実上の結婚である。お姫様の母のお后様の行動もそれを裏付けている。お后様は二人を追いかけて行き、娘を連れ戻すことができなかつた時、娘に胡桃を贈る。

これは、ただの胡桃ではなく、お姫様を王子に結びつけ、二人を結婚させる不思議な力を発揮する魔法の胡桃である。だから、お后様の行為は、娘を王子と結びつけるものなのである。お后様は、駆け落ちした二人の結婚を事実上許しているのである。こういう一連の事態を総合的に考えるならば、王子とお姫様の結婚は、恋愛感情の芽生えた難題解決結婚であり、難題解決結婚に分類するのが妥当なところであろう。

王子のお姫様に対する気持ちは、すでに見てきたように、途中から明らかに愛情が芽生えている。途中、母親に口づけをされ、結婚相手のお姫様のことをすっかり忘れてしまい、少し頼りないが、駆け落ちをしたほどであるから、愛情は強かったに違いない。

お姫様の方は、お昼の弁当を持っていく役を言いつけられているだけなのに、意気消沈している王子を励まし、3度も王子を助けている。この辺りから、お姫様には、王子をかわいそうに思う気持ちを超え、父王が娘をやると言っている王子を普通の異性だとは思わない感情が芽生えてきているであろう。というのも、お姫様は王子を慰め、寝かせる時、3度も虱を取ってやっているからである。虱を取ってやることは、愛着、好意の表れ (Ausdruck der Zuneigung) だからである。この後、二人の結婚がすぐに許されないとなると、お姫様は自分には命の危険性がないにもかかわらず、積極的に駆け落ちに応ずる。父王や母君からの追跡も、自らの判断と行動で振り切る。お姫様の行動はまったく積極的、能動的であり、主導権は完全にお姫様が握っている。王子は受動的で沈黙している。それは、変身劇にもよく表れている。お姫様は自分を薔薇、牧師、魚という、環境の中の核、中心、主体に変え、王子を茨の藪、教会、池という、主体を取り巻く環境、つまり客体に変えている。もちろん、この客体は、奪還される主体を守る客体ではある。王子に忘れさられた後のお姫様の行動と愛情は、さらに強く激しいものとなっている。

このメルヘンにおいても、異次元の世界の援助者が登場し、すべての難題解決に決定的な役割を演じている。前半では、クリストフフェルの石像が難題 (この場合、厳密に言えば、単なる課題である) をすべて解決し、王子はただぐっすり寝ていただけであった。後半でも、アルヴェッガースという地妖たちがあつという間に3つの難題を解決する。王子はここでも寝ているだけであった。

第3番目は『六人の家来 (Die sechs Diener)』(KHM 134) である。

むかし昔お年寄りの女王があった。「女王は魔法使いでした。そしてその娘はお日様の下で一番美しい女の子でした。eine alte Königin, die war eine Zauberin, und ihre Tochter war das schönste Mädchen unter der Sonne.」女王は、美しいお姫様をおとりに人の命を取ることばかり考えていた。お姫様をお嫁さんに欲しいと言う人には、難題を出し、それが解けなければ、女王は命をもらうのでした。

ある王子が美しいお姫様の評判を聞き、父王に許可を申し出た。王は猛反対したが、王子が七年もの間病に臥せってしまったので、とうとう許可を出した。王子はとたんに元気になり、喜んで旅に出た。王子は旅の途中で、小さな山のような (wie ein kleiner Berg) 腹がさらに三千倍も大きくなるという腹男、世界中の「草の伸びる音でも聞こえる das Gras sogar hör ich wachsen」という耳男、世界で一番高い山よりもさらに高くなるのっぽ男、目で見たものすべてを破壊する眼光爆弾男、熱ければ凍え、冷えると熱くってしようがないという寒暖逆男、世界中のことが見渡せる千里眼男に出くわし、家来として一緒に連れて行った。

王子が六人の男を連れて、魔法使いの女王のいる都へ乗り込み、お姫様をいただきたいと言

うと、女王は、紅海の底の指輪を取ってくることに、牡牛三百頭を骨や毛も一緒に丸ごと食べ、葡萄酒三百樽を一滴も残さず飲み干すこと、娘を抱いたまま寝ずに起きておくことという三つの難題を出した。牛の毛が一本でも、葡萄酒が一滴でも残っていたら、命はないということだった。1番目の難題は、千里眼男が海底をのぞいて指輪の位置を確認し、腹男が海水を飲み干し、最後にのっぽ男がかがんで指輪を拾い上げて、簡単に解決した。2番目の難題も、腹男が牛と葡萄酒を平らげ、簡単に解決した。3番目の問題は、一番容易に見えて、容易ではなかった。女王が魔法をかけ、十一時になると、全員寝てしまったからである。その間に、お姫様は逃げ出した。十二時十五分前に魔法の力が消え、みんな目を覚ました。王子が難題解決を諦め、死を覚悟していると、お姫様がそこから三百時間もかかる岩の中に座り、「自分の運命を嘆いている sie....bejammert ihr Schicksal.」のを耳男が聞いた。そこで、のっぽ男が眼光爆弾男を背負い、二～三步いて岩のところへやってきた。眼光爆弾男が目隠しを外し、岩を砕いた。それから、のっぽ男が十二時前までに、お姫様を抱いて連れて帰った。これで、三つの難題 (die drei Bünde) すべてが解決したことになり、女王はお姫様をやらざるを得なくなった。

ところが、女王は娘に「身分の卑しい者のいいなりになり、自分の好みで夫を選ぶ訳にはいかなくは、お前の恥というものだ。‘Schande für dich, daß du gemeinem Volk gehorchen sollst und dir einen Gemahl nicht nach deinem Gefallen wählen darfst.’」と言って、娘をけしかけた。「誇り (das stolze Herz)」を傷つけられた乙女 (Jungfrau) は、燃え上がる巨大な薪の山に誰かが平気で座らなければ、結婚しないと断った。すると、寒暖逆男が火の山の中に座り、三日後ぶるぶる震えながら出てきた。これでいよいよ乙女は見知らぬ男と結婚せざるを得なくなった。

しかし、女王は娘を取り返そうとして、二人が結婚のために教会へ行く途中に、兵士たちを差し向けた。しかし、腹男が飲み込んでいた海水をほんの少し彼らに向かって吐き出すと、兵士たちは溺れ死んでしまった。女王は今度は騎兵を繰り出した。こちらは眼光爆弾男がいとも簡単に粉砕してしまった。こうして、二人は教会で結婚の式を済ませた。

この後、王子はお姫様を城へ連れて帰る時、豚飼いを父だと言い、姫に豚の世話をさせた。お姫様は、これは自分の高慢さと自惚れ (Übermut und Stolz) が招いたことだと嘆いた。お姫様が疲れ果て、豚の世話がもうできなくなった八日目、家来がお姫様を王子のお城へ連れて行った。出迎えた王子はお姫様に口づけをした。そして改めて正式の結婚式が行われた。

このメルヘンの王子とお姫様の結婚はどういう種類であろうか。王子はお姫様をもらう目的で難題に挑む。そして魔法使いの女王から出された3つの難題をすべてやり遂げる。約束どおり、王子はこれでお姫様をもらうことができるはずである。ところが、女王は約束を守らず、娘をけしかけ、娘はもう一つ難題を出す。王子はこれも解決し、やっとお姫様と結婚式を挙げるために教会へ行く。女王はなおも承服せず、王子を殺そうとして、兵士や騎兵を繰り出したが、殲滅させられた。その後で、ようやく結婚ということになった。このメルヘンでは、結婚相手のお姫様自身が難題を出して結婚を阻止しようとするのが特徴である。この局面だけ見ると、約束があったとはいえ、嫌がる相手を奪い取った形になっているので、二人の結婚は略奪結婚のようにも見える。しかし、『二人の王様の子供』の王様と同じく、難題を解決したらお姫様をやるという約束を女王 (と娘のお姫様) が守らず、妨害しただけの話で、二人の結婚はやはり約束どおりの結婚で、難題解決結婚である。

王子はお姫様に相当惚れている。それは、すでに多くの人が難題に挑戦して失敗し、首をは

ねられているにもかかわらず、王子は乙女の大変な美しさ (von der großen Schönheit der Jungfrau) の評判を聞き、難題に挑戦したこと、さらにその乙女が難題を出して王子を殺し、王子との結婚を阻止しようとしたにもかかわらず、あくまでその乙女と結婚しようとし、実際に結婚したことからよくわかる。王子の気持ちを直接叙述した箇所もある。お姫様の寝ずの番をすることになった時である。王子は、月明かりに照らされたお姫様の驚くほどの美しさ (ihre wunderbare Schönheit) を見て、「胸が喜びと愛情で一杯になった er war voll Freude und Liebe」とある。

ところが、お姫様の方は、最後の最後まで王子を好きだと思っていない。むしろ、王子が嫌なのである。お姫様は、母親に「自分の好みで夫を選ぶ訳にはいかなくなるとは、お前の恥というものだ。」と言われ、自らの判断と意志で、王子を焼き殺そうとさえした。それも王子が自分に惚れていること (aus Liebe zu ihr) を利用して。最後に自分の結婚相手が王子であることがわかって、正式の結婚式を挙げて、お姫様の気持ちが変わったという叙述はない。

お姫様は「お日様の下で一番美しい女の子」で、「多くの人とその乙女の美しさに目が眩んだ Viele waren von der Schönheit der Jungfrau verblendet」くらいであるから、この上なく美しい。二人の結婚は、幸か不幸か不明である。

最後に、難題の解決の仕方であるが、このメルヘンでも、難題を解決してお姫様をもらった王子は、実は何もしていない。第1の難題を解決したのは、千里眼男と腹男とのっぼ男で、第2の難題は、腹男で、第3の難題は、耳男とのっぼ男と眼光爆弾男である。また、お姫様が出した難題を解決したのは、寒暖逆男である。また、女王の軍隊を粉砕し、王子の命を助けて結婚を実現したのは、耳男と腹男と眼光爆弾男である。すべて異次元の世界の人達である。王子は、難題解決には一切関わらず、ただその成果だけを手に入れている。

このメルヘンには、父王は登場していないし、家父長的なところはない。お年寄りの女王にもそういう面はまったく見られない。むしろ逆で、家の利害どころか、「自分の好みで夫を選ぶ訳にはいかなくなるとは、お前の恥というものだ。」と言った女王も、それに応えた娘も「自分の好みで夫を選ぶ」こと、つまり、恋愛結婚を当然と考えている。

以上の「類型1」の難題解決結婚において、難題の解決に挑むのはすべて王子である。そして王子は、難題解決の「褒美」として — 約束が守られなかったり、妨害行為があったりするが — お姫様をお嫁さんにもらう。しかし、実際に難題を解決するのは、異次元の世界の人や動物や物であり、王子ではない。王子は何もせず、ただ成果（お姫様）だけを手に入れる。ところが、必ずしもお姫様を手に入れたいがために、難題に取り組むとは限らない。『黄金の鳥』でも『二人の王様の子供』でも、死への恐怖から王子は難題に取り組む。王子がお姫様が好きで好きでたまらず、死をも恐れず難題に挑んでお姫様を手にとろうとしたのは、『六人の家来』だけである。

第2章 類型2の難題解決結婚

第1番目は『三人の紡ぎ女 (Die drei Spinnerinnen)』(KHM 14) である。

昔女の子がいて、怠け者で、糸を紡ごうとしなかった。お母さんがいくら言っても聞かないので、とうとう娘を殴りつけた。娘は大声で泣き出した。その時、ちょうど女王が通りかかった。女王は母親になぜ娘をぶつのか尋ねた。母親は、自分の娘が怠け者だということが人様に

知れることを恥じ、娘が糸を紡ぐのが好きで好きで、どうしても止められないのです、私は貧乏で麻を手に入れることができないのです、と説明した。すると、女王は、それではお城に連れて行きましょう、私の所には麻が山ほどあります、と言って、娘をお城へ連れて行った。

お城に着くと、女王は娘を三つの部屋に案内した。どの部屋も非常に美しい麻で一杯であった。女王は「さあ私のためにこれらの麻を紡いでおくれ。全部やり遂げたら、お前に私の一番上の息子を夫にやろう。Nun spinn mir diesen Flachs, und wenn du es fertig bringst, so sollst du meinen ältesten Sohn zum Gemahl haben;」と言った。娘は、こんな沢山の麻など、朝から晩まで紡いでも、三百歳になってもできっこないと思って、仕事も手に着かず、泣いてばかりいた。

すると、三人の女 (drei Weiber) がやってきた。一人は板のような大きな平らな足 (einen breiten Platschfuß) をしており、もう一人は顎まで垂れ下がるような大きな下唇をしており (eine so große Unterlippe, daß sie über das Kinn herunterhing,)、三人目は平らで大きな親指 (einen breiten Daumen) をしていた。三人の女は泣いている娘に事情を聞き、私たちがやってあげましょう、と言った。ただし、その条件は娘が三人全員を娘の結婚式に招待することであった。女の中の一人は、糸を引いて、足で車を回し、もう一人が糸を唇で湿らせ、最後の一人がそれを回して取り、指で叩き、紡いだ糸を床に置いていった。このようにして、三人娘は三部屋にあった麻糸をあっという間に全部紡いでしまった。そして「私たちに約束したことを忘れちゃだめだよ。そうすれば幸せになるからね。‘vergiß nicht, was du uns versprochen hast, es wird dein Glück sein.’」と言った。

女王は紡ぎ糸の山を見て大変感心し、結婚式を催すことにした。「花婿の王子は、非常に糸紡ぎが上手で働き者の女性をもらうことになったのを喜び、彼女を大変誉めたたえた。der Bräutigam freute sich, daß er eine so geschickte und fleißige Frau bekäme, und lobte sie gewaltig.」娘は、私には大変お世話になった従姉妹 (drei Basen) が三人おります、私が幸せになりましても (in meinem Glück)、ご恩を忘れたくありません、結婚式に招待してもよろしゅうございますか、と尋ねた。女王と花婿は、その申し出を喜んで受け入れた。そして結婚式に三人の乙女 (Jungfern) がやってきた。彼女たちを見たお婿様は、一人一人に、どうしてそんな大きな平らな足や垂れ下がる唇 (die herunterhangende Lippe) や平らで大きな親指をしているのか、と尋ねた。女達はそれぞれ「踏むからです。」「舐めるからです。」「糸をよる (vom Faden drehen) からです。」と答えた。これを聞いた王子 (der Königssohn) は驚いて、私の美しい花嫁 (meine schöne Braut) にはもう決して糸車には手を触れさせない、と言った。こうして、娘は嫌な麻糸紡ぎを免れることになった。

娘と王子との結婚は、分類上は若干厄介である。というのも、三つの部屋一杯の麻を紡ぐことが果たして難題といえるかという疑問があるからである。大量の麻を紡ぐことは困難極まる仕事であることは疑いない。しかし、これには、他のメルヘンによくあるように、一日でとか明日の朝までとか、期限が決められていないので、この地球上の人間に不可能かということ、即座に不可能だとは言えない。つまり、結婚の単なる条件とも言えるのである。しかしながら、娘がいくら怠け者だとはいっても、朝から晩まで紡いでも三百年経ってもできないと言っているのだから、これは当時の人間には不可能な仕事だとみなしていい。その難題を解決して王子との結婚にたどり着いたのであるから、娘と王子との結婚は難題解決結婚に分類するのが適当であろう。

娘が王子をどう思っているのかはよくわからない。女王から糸紡ぎの難題をやり遂げたら、息子を夫にやる、と言われても、困惑しただけであるからである。ただ、結婚式に臨むに当たり、娘が自分の幸せを口にしてるので、一応王子に好感を抱いているか、好意はなくとも、貧乏な娘が一気に王子の妻になる、将来は王様のお后様になるというのであるから、王子との結婚が幸せであるのは間違いない。

王子の方は娘をどう思っているのでしょうか。それについては「花婿の王子は、非常に糸紡ぎが上手で働き者の女性をもらうことになったのを喜び、彼女を大変誉めたたえた。」とあるので、王子は娘との結婚を喜ばしいものと思っている。しかし、それだけで王子が娘に愛情を抱いているとは言えない。働き者の妻をもらうことを喜んでいるだけだからである。しかし、最後の最後で、王子が「私の美しい花嫁」と言っているので、結局は王子は花嫁に好感を抱いているのであろう。

糸を紡ぐという難題を解決したのは、三人の女であって、王子と結婚した娘はまったく何もしていない。ところで、この三人の女であるが、足、唇、親指と身体の一部が異常に発達して、現実にはいそがないが、超現実的、非現実的と断定するのも若干無理がある。しかし、彼女たちは、普通の人間が三百年以上かけてもできない仕事を、その異常に発達した肉体であつという間にやり遂げる、超能力を発揮するのであるから、そして何よりも彼女たちには、グリム童話によく登場するあの異界の存在の賢女（巫女 eine weiße Frau）のように、未来を予言する能力があるのであるから、やはり彼女たちは異界の存在だと言っていいであろう。

第2番目は『がたがたの竹馬小僧 (Rumpelstilzchen)』（KHM 55）である。

むかし昔貧乏な粉屋があり、「美しい娘が一人いた er hatte eine schöne Tochter.」ある時、粉屋は王様に、娘は「藁を紡いで黄金にすることができます。die kann Stroh zu Gold spinnen.」と言った。すると、王様は娘を藁が一杯詰まった部屋へ連れて行き、朝までに藁を紡いで黄金にしなければ命はないものと思え、と言った。娘は不安になって泣き出した。すると、突然戸が開き、小さな小人 (ein kleines Männchen) が入ってきて、娘に事情を尋ねた。小人は、首飾りと交換に仕事を引き受け、藁を全部黄金の糸に変えた。

朝やってきた王様は、これを見てびっくりしたが、今度は娘をもっと大きな部屋へ連れて行き、命が惜しければ、この藁も一晩で黄金にせよ、と命令した。娘が泣いていると、またあの小人がやってきて、指輪と交換に、朝までに仕事を片付けてしまった。

これを見た王様は、もっと黄金が欲しくなり、さらに大きな部屋へ娘を連れて行き、「これを今夜中に紡げ。もしうまくいけば、お前をわしの妻にしてやる。‘die mußt du noch in dieser Nacht verspinnen: gelingt dir aber, so sollst du meine Gemahlin werden.’」と言った。娘が一人になると、またあの小人がやってきた。娘がもうあげるものがないと言うと、小人は「お后になってできた最初の子をくれると約束しなさい。‘So versprich mir, wenn du Königin wirst, dein erstes Kind.’」と言った。娘が仕方なく同意すると、小人はまた朝までに仕事をやってくれた。こうして「粉屋の美しい娘は王様のお后様になった。die schöne Müllerstochter ward eine Königin.」

お后様に美しい子供が生まれ、小人が取りにやってきたが、お后様が嘆き悲しんで懇願すると、小人は自分の名前を当てたら、勘弁してやると言った。お后様が苦勞の末、小人に「がたがたの竹馬小僧」と言うと、小人は「悪魔が教えやがったな。Das hat dir der Teufel gesagt」と叫び、「自らの体を真っ二つに引き裂いてしまった。das Männlein riß sich selbst mitten

entzwei.]

貧乏な粉屋の娘が、王様から部屋一杯の菓を一晩で黄金の糸に紡げ、失敗すれば命はない、という命令(超難題)を3度も受ける。3度目の難題では、うまくいけば王様の妻にしてやるということだった。小人のお陰で、粉屋の娘は難題をすべて解決し、王様の妻になった。だから、これも難題解決結婚である。

このメルヘンでも、難題を解決したのは、難題を課された粉屋の娘ではなく、異界の存在、小人である。娘は何もせずに、王様のお后様になった。

粉屋の娘は美しいが、王様は娘にまったく好意を抱いていない。王様は娘を妻にしたが、それは「たとえ粉屋の娘であっても、全世界でこの娘以上に金持ちの女を見つけることはできないと王様が考えた。‘Wenns auch eine Müllerstochter ist,’ dachte er, ‘eine reichere Frau finde ich in der ganzen Welt nicht.’」からであり、明らかに金目当ての結婚である。

粉屋の娘も王様に何の感情も抱いていないようである。王様に「妻にしてやる」と言われても、ぜんぜん喜んでいない。結婚式を挙げたときも、結婚後の生活でも、娘の王様に対する気持ちは一切描かれていない。

第3章 類型3の難題解決結婚

第1番目は『白い蛇 (Die weiße Schlange)』(KHM 17)である。

今は昔、一人の王様があった。この王様は、お昼になると毎日一人きりになって、誰にも見られないように何かを密かに食べる習慣があった。ある日、信任の厚い召使いが好奇心に駆られ、それを見ると、白い蛇であった。そしてそれをそっと口にすると、動物の言葉がわかるようになった。

ちょうどその時、お后様の一番美しい指輪がなくなるという事件が起こった。その召使いは信任が厚く、どこにでも自由に出入りできたので、彼に嫌疑がかけられた。王様は、明日までに真犯人を捜すことができなければお前を処刑する、と言った。召使いは途方に暮れ、中庭に出てあれこれ思案していた。その時、川辺で鴨たちがおしゃべりをしているのが聞こえた。そのうちの一羽が、指輪を飲み込んで胃が重いと saying していた。召使いはすぐさま鴨を捕まえ、料理人にさばいてもらった。すると胃袋から指輪が出てきた。それで、疑いは晴れたが、召使いは、馬一頭と旅費をもらい、世の中に出て行くことにした。

ある日池の側に来ると、魚が三匹あしの茂みに入り込み、あえいでいた。動物の言葉がわかる召使いは、魚たちが惨めな死を待つばかりだ (daß sie so elend umkommen müßten.) と言っているのが聞こえた。憐れみの心を持つ (ein mitleideiges Herz) 召使いは、魚たちを助けてやった。魚たちは「この恩に報います。 wir wollen … dirs vergelten,」と言った。

馬に乗って先へ行くと、蟻の王様 (ein Ameisenkönig) が、人間の乗った馬が家来を踏みつぶす、と嘆いていた。召使いが蟻をよけて、脇道を通ると、蟻の王様は「この恩に報います。」と言った。

それからしばらくして、森へ入ると、鴉の親が子鴉たちに、もう自分たちで食べていけと言って、追い払っていた。子鴉たちはまだ自力で飛ぶこともできず、お腹が空いて死んじゃうよと、親に訴えていた。これを聞いた善良な若者 (der gute Jüngling) は、馬を殺して、子鴉の餌にしてやった。子鴉たちは「この恩に報います。」と言った。

召使いは、しばらくしてある大きな都 (eine große Stadt) に着いた。都では、ある者が馬に乗って「お姫様がお婿様を捜しておられるが、お姫様をもらいたい者は、難題をやり遂げねばならない、もしうまくいかなければ、命はない。die Königstochter suche einen Gemahl, wer sich aber um sie bewerben wolle, der müsse eine schwere Aufgabe vollbringen, und könne er es nicht glücklich ausführen, so habe er sein Leben verwirkt.」と触れ回っていた。すでに多くの者がこれに挑戦し命を失っていた。

「若者(召使い)は、お姫様を見て、その非常な美しさに目が眩み、危険なことをすっかり忘れ、王様の御前に歩み出て、お姫様を頂きたいと申し出た。Der Jüngling, als er die Königstochter sah, ward er von ihrer großen Schönheit so verblendet, daß er alle Gefahr vergaß, vor den König trat und sich als Freier meldete.」若者は海に連れて行かれた。それから、海に指輪が投げ込まれた。課題はその指輪を海の底から拾ってくることであった。失敗すれば、海で命を落とすことになる、と王様に言われた。若者は海辺に立って、どうしたらいいか考えていた。すると、魚が三匹泳いできて、指輪を持ってきてくれた。その魚は、若者が助けてやったあの魚であった。「若者は大喜びでそれを王様の所に持って行った。そして約束の褒美を王様からいただくと期待に胸をふくらませていた。Voll Freude brachte er ihn dem Könige und erwartete, daß er ihm den verheißenen Lohn gewähren würde.」

ところが、誇り高いお姫様は、その若者が自分とは家柄が違うことを知り Die stolze Königstochter aber, als sie vernahm, daß er ihr nicht ebenbürtig war,、もう一つ課題 (eine zweite Aufgabe) を成し遂げることが先よ、と言い、黍が一杯入った袋を十袋も草むらにまき散らし、明日の朝お日様があがる前に、一粒も残さず、全部拾いなさい、と言った。若者は悲しそうに庭に座ったまま、死を待つばかりであった。ところが、最初の朝日が射し込んだとき、若者の目に入ったものは、黍が詰まった十の袋であった。若者が以前助けてやった蟻たちがやってくれていたのである。

翌朝お姫様がやってきて、それを見て驚いたが、誇りが許さず、命の木のリンゴ (einen Apfel vom Baume des Lebens) を持ってくるまでは、私の伴侶になることはできません、と言った。若者にはそんなことは皆目見当がつかなかった。ところが、いつか助けてやったあの子鴉が大きくなって、そのリンゴをくわえて持ってきてくれた。若者は喜んでそれを美しいお姫様の所へ持っていった。これで、お姫様も逃げ口上が無くなった。「二人は、一緒に命の木のリンゴを食べた。すると、お姫様の心は若者への愛情で一杯になった。そして二人は幸せを妨げられることなく、非常に長生きをした。Sie teilten den Apfel des Lebens und aßen ihn zusammen: da ward ihr Herz mit Liebe zu ihm erfüllt, und sie erreichten in ungestörtem Glück ein hohes Alter.」

召使いの若者とお姫様の結婚は、若者が3つの難題(海底から指輪を拾ってくること、十袋の黍を全部拾うこと、命の木のリンゴを取ってくること)をやり遂げて、やっとお姫様をもらうことができたので、難題解決結婚である。

「若者は、非常に美しいお姫様を見て、危険なことをすっかり忘れ、王様の御前に歩み出て、お姫様を頂きたいと申し出た。」というように、若者はお姫様にぞっこんで、命を失うことがあってもお姫様をお嫁さんにもらいたいと思っている。

お姫様の方は、若者に好意を抱いていないどころか、家柄が違うので、若者を軽蔑している。そしてお姫様自ら2つの難題を出して、若者との結婚を阻止しようとした。ところが、最後の

最後になって、命の木のリンゴを食べて、お姫様に若者への愛情が芽生える。これはストーリー全体からして唐突で不自然であるが、それもそのはず、グリムが最後を書き換えたからである。

父王は若干影が薄いが、難題解決と引き替えに娘を嫁にやるというのであるから、家父長的である。二人の結婚生活は、お姫様が若者を避けていたにもかかわらず、幸せである。

召使いは難題を解決して結婚したわけであるが、実際に難題を解決したのは、(異次元の世界の) 魚、蟻、鴉であり、召使いは悩んでいるだけで、何の働きも、行動もしていない。

第2番目は『二人兄弟 (Die zwei Brüder)』(KHM 60) である。

むかし昔、金持ちの兄と貧乏人の弟があった。弟には双子の子供がいた。ある日、柴を取りに行った弟が森の中で黄金の鳥 (Goldvogel) を見つけた。石を投げると黄金の羽が一枚落ちた。弟が兄さんのところへ持って行くと、兄さんはお金を沢山 (viel Geld) くれた。それから、弟はその黄金の鳥を捕まえ、兄さんのところへ持って行くと、金貨を山のように (einen großen Haufen Gold) くれた。この鳥の心臓と肝臓を食べた者は、毎朝枕元に金貨を一つ (ein Goldstück) もらえるからであった。兄さんが鳥を焼いている時、双子が串をひっくり返すと、かけらが二つ落ちた。お腹が空いていた子供はそれらを食べてしまった。翌朝二人の子供が起きると、金貨が二つ床に転がっていた。びっくりした弟が兄さんに話すと、兄さんは「お前の子供たちは悪魔と関係しているんだ。deine Kinder sind mit dem Bösen im Spiel」、子供を追い出さないと、お前も悪魔に破滅させられるぞ、と弟を脅した。怖くなった弟は、悲しい気持ちになりながらも、子供を森の中へ置き去りにした。

兄弟は、森の奥深くで狩人に会い、狩人に育てられた。立派な狩人に育った二人は、養父から猟銃 (Büchse) と犬と光り輝く短刀 (ein blankes Messer) をもらい、広い世界へ腕試しに出かけていくことにした。兄弟がある森へ入ると、兎を見つけた。腹のたしにしようと思って、猟銃で撃とうとすると、兎が撃たないでくれ、その代わり子供を二羽あげます、と言った。兄弟が撃つのをやめると、兎が二羽後からついてきた。同じような出来事が、狐、狼、熊、ライオンと続いた。兄弟は、動物を一頭ずつ分け、短刀を木に突き刺し、一人は東へ、一人は西へと分かれて旅をすることにした。

弟はある都へやってきた。都では喪中の黒い布が張り渡してあったので、宿屋の主人に聞くと、毎年処女を竜に捧げてきて、人身御供はもう王様のたった一人のお姫様以外にいなかったこと、それが明日だということ、だから竜を退治した者にはお姫様を妻にやり、国の跡継ぎにするとのことだった。弟は動物たちを連れて竜山へ出かけた。山上には教会があり、祭壇にはなみなみと注いだ杯が三つあった。狩人がそれを飲むと、戸口に埋められていた重い剣を軽々と持ち上げることができた。狩人は連れてこられたお姫様を教会の中へ入れ、火を吐く七つ頭の竜と戦い、重い剣で竜の頭と尻尾を叩き切った。しかし、狩人にはもう戦う力はなくなった。すると、動物たちが竜をずたずたに引き裂いてくれた。

気絶していたお姫様に意識が戻ると、喜んで「これで、貴方様が私の最も愛する伴侶におなりになるのです。nun wirst du mein liebster Gemahl werden,」と言い、狩人に名前を書いたハンカチ (Ihr Taschentuch aber, in dem ihr Name stand,) を与え、動物たちには珊瑚の首飾りを、そしてライオンには首飾りの金の留め金を与えた。狩人は竜の七つの頭から舌を切り取り、ハンカチに包んで持っておいた。しかし、疲れていた狩人はお姫様と一緒に寝てしまった。見張り役の動物たちも次々に寝てしまった。

これを見た悪者で神をも恐れぬ, weil er böse und gottlos war, 侍従長 (Marschall) は、狩人

の首をはね、お姫様を脅して手柄を横取りしようとした。お姫様は侍従長と結婚せざるを得なくなりましたが、結婚式を一年先に延ばしてもらった。

目を覚ました動物たちの中で、兎が命の根 (die Lebenswurzel) を取ってきた。それから、ライオンが狩人の頭を首に付け、口に命の根を入れると、狩人は生き返った。狩人が一年後にお姫様の都へ戻ってくると、今度は深紅の幕が張り渡してあった。お姫様の御婚礼の祝賀が明日に迫っていたのである。動物たちを通じて、狩人が今も生きていることを知ったお姫様は、狩人にお迎えの者を遣わした。お城に着いて、王様の隣に座った狩人は、王様から竜の頭を見せられ、侍従長の手柄話を聞くと、侍従長に向かって、竜の口を開け、舌はどこにございます、と言った。侍従長が竜の舌などない、と言うと、狩人は七つの舌を取り出し、竜の口に当てはめた。すると、ぴったり口に納まった。それから、お姫様の名前が刺繍してあるハンカチを取り出して、お姫様に見せた。そこで、お姫様は本当のことを話した。それを聞いた「王様は娘を狩人にやった。der König aber übergab seine Tochter dem Jäger」侍従長は、牛四頭による引き裂きの刑に処せられた。「若い王様と若いお后様は機嫌良く、ともに満ち足りて (楽しく) 暮らした。Nun waren der junge König und die junge Königin guter Dinge und lebten vergnügt zusammen.」

結婚後、狩に出た若い王様は魔女に石にされた。都にやってきた兄は、弟の王様と間違えられるが、寝室では、お后様との間に両刃の剣を置いて寝た。短刀が半分だけ錆びていることに気づいた兄は、弟を救いに出かけた。そして銀の弾で魔女の術を打ち破り、弟を生き返らせた。兄が妻のお姫様と一緒に寝たことを聞いた弟は、嫉妬の余り兄の首をはねた。弟は後悔する。すると、兎が命の根を取ってきて、兄を生き返らせた。後で、弟はお姫様から両刃の剣の話を聞き、兄の潔癖を知る。

貧乏人の箒屋の息子は竜退治という難題をやり遂げ、お姫様をもらったので、二人の結婚は難題解決結婚である。

このメルヘンでも、動物たちや杯の酒や剣という異次元の世界からの助っ人や贈物が、難題を解決するに当たり、それぞれがそれぞれにふさわしい役割を、時には決定的な役割を演ずる。例えば、動物たちは竜の吐く炎で燃え上がる火を消し、窒息死しかけた狩人を救ったり、竜に最後の止めを刺したり、殺された主人を生き返らせたりする。しかし、このメルヘンでは、弟の狩人は、杯の酒を飲んで、力をつけ、重い剣を持って、自ら竜と格闘する。ここが少し違う。これまでの難題解決結婚の主人公は、難題を解決するうえで何の役割も演じなかった。いわば果報は寝て待ての状態であった。

お姫様をもらった狩人は、お姫様をどう思っているのでしょうか。狩人は竜退治の前にお姫様に会うが、何の反応も示さない。そして竜を退治した後、お姫様から、愛する伴侶 (夫) は貴女様ですと言われても、また侍従長の嘘を暴き、実際にお姫様をもらうことになった時も、狩人は何の喜びも表さない。反応すらない。他の場面でも、狩人がお姫様に関心を抱いているという様子はない。狩人が感情を顕わにした唯一の場面は、兄がお后様と一緒に寝たという話をしたときである。この嫉妬と怒り (eifersüchtig und zornig) は、断定はできないが、お后様への愛情の裏返しと言える。しかし、これは結婚後のことである。話全体からすると、狩人に愛情があるとは思えない。ただ、お姫様をもらったことは、貧乏な箒屋の息子にとっては、この上ない出世であり、そういう意味で、幸せなのは間違いない。

では、お姫様の方はどうでしょうか。狩人に命を救ってもらった時、お姫様は「喜んで Sie

freute sich]、「これで、貴方様が私の最も愛する伴侶におなりになるのです。」と言う。「私の最も愛する伴侶」と言っているくらいであるから、お姫様に狩人への愛情がないはずはない。しかし、この台詞の後に次の台詞が続く。「と言いますのも、私の父が竜を退治した方に私を差し上げるという約束を致しておるからです。denn mein Vater hat mich demjenigen versprochen, der den Drachen tötet.」自分の感情を出さないばかりか、自分の結婚を父の約束事だからと、他人のせいになっている。これでは、liebst という最上級の言葉も単なる形式語でしかない。実際形式語として使われる場合も多々ある。そうすると、お姫様の言葉は「私の最も愛する伴侶となる方は、父が決めましたように、竜を退治した方です。」と言い換えることもできる。それに、その言葉が出た場面からも、mein liebster Gemahl は、額面どおりに受け取ることはできない。竜の生贄にされ、恐怖と不安の余り気を失っていたお姫様のこと、まっ先に狩人への愛情がというよりも、絶体絶命の窮地から救われた喜び、命の恩人への感謝の気持ちと尊敬の念が、お姫様の中に沸き起こってきたと理解するのが自然であろう。その際、お姫様は「喜んで Sie freute sich」いるが、それは、自分が救われたことに対してであり、狩人と結婚できることに対してではない。なぜなら er (der Jäger) sagte ihr (der Königstochter), daß sie nun erlöst wäre. Sie freute sich とあるからである。事実、後に狩人と実際に結婚することになった時、本来ならば喜びの頂点にあるはずだが、お姫様は何の喜びも示していない。ただ、お姫様が侍従長との結婚を一年延期した時に、「その間に愛する狩人の何らかの消息を知ることができると思ったからでした。denn sie dachte in der Zeit etwas von ihrem lieben Jäger zu hören.」と理由が述べられ、「愛する狩人」とあるので、お姫様に愛情はないことはない。しかし、その本当のところは、自分を救ってくれ、父が決めた正当な夫となるはずの狩人に対する忠誠心と、侍従長の裏切りと犯罪への憤怒、正義感から取った行動であろう。お姫様は、侍従長の悪事を暴く時も、狩人への思いは語らない。「愛する」とか「最も愛する」とかいう言葉は、その言葉が出てくる場面からして、命の恩人への謝意としての、また正当な結婚相手への忠誠としての愛以上のものを意味しているとは思えない。このメルヘン全体の流れからしても、恋するお姫様、勇敢な狩人に好意を寄せるお姫様というイメージはまったくない。

二人の結婚生活は、結婚後「若い王様と若いお后様は機嫌良く、ともに満ち足りて（楽しく）暮らした。」とあり、兄と弟と若いお后様などが飲食をともにしながら「楽しんだ waren fröhlich」とあるので、幸せである。

第3番目は『黄金のがちょう（Die goldene Gans）』（KHM 64）である。

「むかし一人の男があり、息子が三人いた。末の子は馬鹿太郎といい、人々に蔑まれ、笑いものにされ、ことあるごとに冷遇されていた。Es war ein Mann, der hatte drei Söhne, davon hieß der jüngste der Dummling, und wurde verachtet und verspottet, und bei jeder Gelegenheit zurückgesetzt.」

ある時、長男が森へ木を伐りに行き、年老いた灰色の小人（ein altes graues Männlein）に出くわした。長男は、お菓子とぶどう酒を少し下さいと言う小人の頼みをはねつけ、木を伐り始めた。すると、誤って斧で腕を切ってしまった。「これは灰色の小人のせいであった。Das war aber von dem grauen Männchen gekommen.」次に次男が森へ入ったが、次男も小人のおねだりを退け、斧で脚を切ってしまった。

馬鹿太郎は、灰のお菓子（einen Kuchen, der war mit Wasser in der Asche gebacken,）と酸っぱいビールを一本（eine Flasche saures Bier）持たせてもらい、森へ入った。馬鹿太郎も小人

に出くわし、食べ物と飲み物をおねだりされた。馬鹿太郎は小人と一緒に食べようと思い、持ってきたものを取り出すと、それは上等の卵のお菓子と良質のぶどう酒に変わっていた。そのうえ、小人は「お前は良い心を持っており、お前のものを喜んで分け与えてくれたので、わしがお前に幸運を授けてやろう。weil du ein gutes Herz hast und von dem Deinigen gerne mitteilst, so will ich dir Glück bescheren.」と言って、純金の羽の鷺鳥 (eine Gans, die hatte Federn von reinem Gold) のある所を教えてくれた。

馬鹿太郎は鷺鳥を持ってある宿屋に泊まった。宿屋の一番上の娘は、鷺鳥が欲しくなり、こっそりと鷺鳥に触った。すると鷺鳥から手が離れなくなった。次女も羽を取ろうとして、姉に触ると、姉から手が離れなくなった。末の娘も同じことを考え、姉に触り、離れなくなった。馬鹿太郎が鷺鳥を抱えて出かけると、後ろから娘が三人列をなして付いてきた。これを見た牧師 (der Pfarrer) は、若い男の後にくっついて離れない娘たちを諷めようとして、末の娘の手をつかんで引き離そうとした。ところが、牧師も娘にくっついて離れなくなった。そこへ教会用務員 (der Küster) がやって来て、牧師様、今日は幼児洗礼がありますよ、と言って、牧師の袖を引っ張った。すると、牧師にくっついて離れなくなった。そこへ農夫が二人通りかかった。牧師に引き離してくれと頼まれた農夫が用務員をつかむと、農夫たちも離れなくなった。

この後、馬鹿太郎はある都 (Stadt) へやってきた。都を治めていた王様にはくそ真面目な (ernsthaft) お姫様がいて、王様は「もしも誰か姫を笑わせることができたなら、姫と結婚させてやる。wer sie könnte zum Lachen bringen, der sollte sie heiraten」という掟をこしらえていた。馬鹿太郎が鷺鳥と七人の人間をぞろぞろと引き連れてお姫様の前に出ると、お姫様は大声で笑い出し、笑いが止まらなくなった。馬鹿太郎がお姫様を下さいと言うと、王様は、その前に地下室一杯のぶどう酒を飲み干す者 (einen Mann ..., der einen Keller voll Wein austrinken könnte.) を連れて来い、と言ってお姫様をくれなかった。馬鹿太郎は灰色の小人のことを思い出し、森へ行った。すると、喉が渇いてしょうがないという男に出くわした。この男を地下室に連れて行くと、地下室のぶどう酒を全部空にしてしまった。ところが、王様は今度は山のようなパンを平らげる男 (einen Mann, der einen Berg voll Brot aufessen könnte.) を連れてこなければ駄目だと言った。馬鹿太郎がまた小人のいた森へ行くと、空腹で飢え死にしそうだという男に出くわした。この男は、国中の小麦粉で作った巨大なパンの山を一日で平らげてしまった。しかし、王様はこれでも承知せず、水陸両用の船 (ein Schiff, das zu Land und zu Wasser fahren könnte) を用意したらすぐに娘をやる、と言った。馬鹿太郎が森へ行くと、あの年老いた灰色の小人がいて、「お前のために飲んだり食べたりしてやった、船もお前にやろう」と言って、船をくれた。

水陸両用の船を見ると、王様はどうとうお姫様を馬鹿太郎にやることにした。「結婚式がとり行われ、王様がお隠れになった後、馬鹿太郎が王国を継ぎ、お后様を相手に長い間楽しく (何不足なく) 暮らしました。Die Hochzeit ward gefeiert, nach des Königs Tod erbte der Dummling das Reich, und lebte lange Zeit vergnugt mit seiner Gemahlin.」

馬鹿太郎とお姫様の結婚はどんなものであろうか。笑ったことのないお姫様を笑わせたなら、そのものに姫をやる、というのは難題ではなく、単なる課題である。その後の「地下室一杯のぶどう酒を飲み干す」、「山のようなパンを平らげる」、「水陸両用の船」が難題である。馬鹿太郎は、これら全部をやり遂げて、お姫様をもらったのであるから、まさに難題解決結婚である。

馬鹿太郎は難題を解決してお姫様をもらったが、実際に難題を解決したのは異次元の世界の

小人である。馬鹿太郎はまったく何もしていない。馬鹿太郎は、難題を解決してやろうとして変身して待っていた小人をただ連れてきたり、小人の造った水陸両用の船をただ単に持って行っただけである。また、異界の小人からの贈物「黄金のがちょう」がなければ、お姫様を笑わすこともできなかった。

馬鹿太郎のお姫様に対する気持ちは、はっきりしていない。馬鹿太郎は、お姫様を笑わした後と第1、第2の課題を解決した後、「お姫様をお嫁さんにくれるように要求した *Da verlangte sie der Dummling zur Braut,*」し、「お后様を相手に長い間楽しく（何不足なく）暮らしました。」とあるので、お姫様のことを気に入っておるのは確かであろうが、それが恋愛感情かという、疑わしい。お姫様の気持ちはもっとわからない。美しいかどうかもわからない。このメルヘンでは、お姫様は難題解決の単なる褒美に過ぎない。

二人の結婚生活は幸せそうであるが、幸せなのがはっきりしているのは馬鹿太郎の方だけで、お姫様が幸せかどうかはわからない。そこで、二人の生活の幸不幸は不明ということにしておく。父王は、姫を笑わしたら嫁にやるとか、馬鹿太郎が気に入らないから姫をやらないとか、娘の気持ちや感情、意志などぜんぜん考慮せず、娘をまるで景品のように扱っている。

第4番目は『地妖 (Dat Erdmänneken)』(KHM 91) である。

むかし昔、王様があり、お姫様が三人あった。王様は、大変大切にしているりんごの木からりんごをもぐ者は、地下深く沈んでしまうように、呪いをかけていた (*verwünschede*)。三人のお姫様はりんごが欲しくてたまらず、りんごをもいで食べた。それで、三人は地の底深く沈んでいった。心配した王様は「お姫様たちを連れて帰った者には、その内の一人をお嫁さんにやる。 *wer ünne sine Döchter wier brechte, de sull ene davon tor Fruen hewen.*」という御触れを出した。

三人の若い狩人がお姫様を探しに旅に出た。そしてある大きなお城 (*en grot Schlott*) に着いた。長男が番をしていると、小さな小さな小人 (*so en klein klein Männeken*) がやって来て、パンを一切ねだった。パンをあげると、小人はそれをわざと落とし、狩人が拾っているすきに、長男を殴りつけた。次男も同じ目にあった。

馬鹿のハンスと言われていた末っ子は、わざと落とした小人を袋叩きにした。すると、小人は許しを請い、お姫様たちの居場所を教えてくれた。さらに小人はハンスに、お姫様のところには多頭の竜 (*en Drachen mit villen Köppen*) がいるので、山刀と鈴 (*sinen Hirschfänger un en Schelle*) を持って行き、山刀で竜の首を切って、お姫様を救わなければならない、と言った。ハンスは泉の底まで下りて行き、九つ頭の竜、七つ頭の竜、四つ頭の竜を次々に殺し、お姫様を救った。それから、お姫様を一人ずつ籠に入れて、兄二人に地上まであげてもらった。最後にハンスがあげてもらふ番だったが、ハンスは小人の言葉を思い出し、籠の中に石を入れておいた。案の定兄たちは籠を途中で下に落とした。ハンスは命拾いしたが、泉の底から出られない。死を覚悟していたが、壁に掛かっている笛を見つけ、それを吹いてみた。すると、地妖が沢山 (*so viele Erdmännekens*) 出て来て、ハンスを地上に引き上げてくれた。ハンスがお城に着くと、お姫様の一人がちょうど結婚式を挙げるところであった。三人のお姫様はハンスを見ると気絶してしまった。王様はハンスが悪者だと思い、ハンスを牢屋へぶち込んだ。息を吹き返したお姫様方は、父王にハンスを許すように頼んだ。父王は理由を尋ねたが、お姫様は言おうとしなかった。そこで、ストーブ (*den Owen*) に話をするように言うと、お姫様は本当のことを話した。王様は兄二人を絞首刑に処し、「一番下のお姫様をハンスにやった。 *den*

einen gibt he de jungste Tochter:」

ハンスは、小人のお陰で、お姫様の消息を知り、多頭の竜を殺し、お姫様を救い出し、末のお姫様をもらった。それゆえ、これは難題解決結婚である。

では、ハンスが難題を解決した経緯を見てみよう。ハンスは、まず地妖からお姫様の居場所と救い出す方法を教えてもらった。これは難題を解決する上で、決定的な一歩であった。兄たちの悪巧みを察知し、命拾いしたのも地妖のお陰であった。泉の底からハンスを引き上げて救ってくれたのも地妖であった。したがって、難題を解決し、お姫様をもらう上で、異次元の世界の地妖が決定的な役割を果たしている。しかし、山刀で竜を退治したのはハンスであり、このメルヘンでは、主人公のハンス自身も大きな役割を演じている。

ハンスがお姫様をお嫁さんに欲しいと思った理由は、「お姫様方は誰にでもとても親切で、顔も非常に美しかったからである。 , *wil se wören gegen jedermann so fründlig un so schön von Angesichte west.*」しかし、ハンスがお姫様に惹かれたのは、特定のお姫様に対してではない。三人のお姫様のうち、ハンスが好きだったのは誰かは、最後になってもわからない。誰でも良かったとしか解釈できない。最後にお姫様をもらうシーンでも、ハンスはこの姫様を下さいとは言っていない。ただ、王様がやると言った末のお姫様をもらったまでである。ハンスと結婚した末のお姫様の気持ちはもっとわからない。お姫様は、無言、無感情、無人格で、まるで褒美の品のように、王様の意のままハンスに与えられる。自分の娘を品物のように扱う王様は、まったく家父長的である。

第5番目は『二人の旅人 (Die beiden Wanderer)』 (KHM 107) である。

靴屋と仕立屋が旅の途中で会い、一緒に旅をすることになった。旅を始めてから五日目の朝、食べ物なくなった仕立屋は、空腹で起き上がれなくなった。すると、靴屋は右目を出せばパンを一切れやると言い、右目を抉り取った。七日目の朝には、靴屋はパン一切れで仕立屋の左目も抉り取った。それから、靴屋は仕立屋を野原の絞首台のそばに寝転ばせ、一人で先へ行ってしまった。絞首台の罪人が露で目を洗えば、目玉が蘇るという話をしていた。仕立屋が露で目を洗うと、目が二つともまた蘇った。

仕立屋はまた旅を続けた。野原で (im Felde) 出くわした栗毛の子馬 (ein braunes Füllen) に乗ろうとすると、子馬は、私はまだ幼く、背骨が折れますから勘弁して下さい、「もしかしたらあなたに恩返しをすることのできる時も来るかもしれません。 *Es kommt vielleicht eine Zeit, wo ich dirs lohnen kann.*」と言った。それで、子馬を放してやった。先へ行くと、草原を (über die Wiese) こうのとりが一羽歩いていて、取って食おうとすると、こうのとりは、やめて下さい、「私を生かしてくれれば、いつかまたあなたに恩返しをすることもできます。 *Läßt du mir mein Leben, so kann ich dirs ein andermal vergelten.*」と言った。そこで仕立屋はこうのとりを放してやった。先へ行くと、池に小鴨が泳いでいた。仕立屋が一羽を捕まえ、首をひねろうとすると、親鴨が「あなたを誰かがさらっていき、あなたの命を取ろうとしたら、あなたのお母さんがどんなに嘆くか、考えないのですか。 *Denkst du nicht, , wie deine Mutter jammern würde, wenn dich einer wegholen und dir den Garaus machen wollte?*」と言った。そこで、仕立屋は鴨を池に戻してやった。仕立屋が振り向くと、老木の中に蜜蜂の巣があった。蜂蜜を取ろうとすると、女王蜂が「そのままにして、立ち去っていくなら、またいつかこのお礼をして差し上げますよ。 *Läßt du uns aber in Ruhe und gehst deiner Wege, so wollen wir dir ein andermal dafür einen Dienst leisten.*」と言った。仕立屋はそのままにして立ち去った。

仕立屋はある都に入り、腕を磨いてついに宮中のお抱えの仕立屋（Hofschneider）になった。ところが、靴屋もお抱えの靴屋になっていた。靴屋は王様に、仕立屋は昔になくなった黄金の冠を持ってくると言っていると、告げ口した。王様は仕立屋に持って来いと命令した。仕立屋が困っていると、あの親鴨が池の底から黄金の冠を取ってきてくれた。それを王様のところに持っていくと、王様は大変お喜びになり、仕立屋の首に黄金の鎖をかけてくれた。靴屋は、今度は王様に、仕立屋が王様のお城の模型を蜜蝋で寸分違わずに作ると申ししております、と告げた。王様は、すぐにそうしろ、できなければ一生地下牢にぶち込む、と言った。仕立屋が逃げようとして老木のところまで来ると、あの女王蜂が現れ、お城を作ってあげましょう、と言った。仕立屋がお城の模型を王様のところへ持っていくと、王様は感心し、仕立屋に大きな石の家をやった。すると靴屋は、仕立屋が水の出ないお城の中庭に水晶のように澄んだ水の出る噴水を作ると申ししております、と王様に告げた。王様は、そうしなければ、死刑に処す、と仕立屋に言った。仕立屋が今度こそは命がないと思って、泣きながら歩いていると、例の子馬がやってきた。子馬はお城の中庭で、稲妻のような速さで三回まわり、倒れた。すると、水晶のように澄んだ水が吹き出てきた。王様は喜んで仕立屋を抱きしめた。靴屋は、今度は王様に男の子がいないのに目をつけ、仕立屋が王様に王子を連れてまいると申ししております、と告げた。王様は「九日以内にわしのところに王子を連れてくれば、長女を妻にやる。‘wenn du mir binnen neun Tagen einen Sohn bringen läßt, so sollst du meine älteste Tochter zur Frau haben.’」と言った。仕立屋はこれは無理だと思って、密かに都を抜け出した。そして草原にさしかかった時、あのこうのとりに出くわした。こうのとりは、私が助けてあげましょうと言ひ、九日目に天使のような美しい子（ein Kind,, das schön wie ein Engel,）をくわえて、お城へやってきた。お后は嬉しさの余り赤ちゃんを抱きしめ、口づけをした。こうして仕立屋は一番上のお姫様ももらった。都を追放された靴屋は、絞首台のところで、鴉に目玉を二つともつつき出された。

さて、最後の課題であるが、男の子のできないお后様に王子を授ける、つまり他人に子供を生ませる（持ってくる）、それも女の子ではなく男の子を、しかも九日以内という期限付きで、というのであるから、それは当時は人間の力では不可能なことであった。出生前診断で男女がわかり、男女を生み分けられるようになった現代でも、九日以内というのは不可能である。それゆえ、それは難題中の難題といえる。この場合、難題は靴屋が仕掛けた罠で、仕立屋自らが望んだものではないが、それを解決して、お姫様をもらったわけであるから、二人の結婚は難題解決結婚である。この難題解決にあたって、仕立屋は何もしていない。こうのとりが王子を連れてきただけである。また、結婚と直接は結びつかない他の3つの難題の解決も、鴨、蜜蜂、子馬がすべて引き受け、仕立屋はまったく何もしていない。

仕立屋は、お姫様をお嫁さんにもらうことは身に余ることと思っているが、お姫様に好意を寄せているわけではない。王様からうまくやれば長女をやると言われた時、仕立屋は「報酬（褒美）はいかにもでかい。Der Lohn ist freilich groß,」と考えながらも、お城を逃げ出した。つまり、「報酬」を諦めたのである。仕立屋は、お姫様を難題解決の「報酬」としか考えておらず、しかもそれを諦めたのであるから、好意を寄せているどころではない。お姫様も仕立屋を何とも思っていない。父王の約束どおり、仕立屋と結婚したままである。王様は、娘の意思も確かめず、勝手に、難題を解決したら長女をやると約束し、娘をまるで景品のように扱っている。事実、仕立屋がお姫様をもらった時、「私はまるで大きなくじを引き当てたかのようだ。Es ist mir geradeso, als wenn ich das große Los gewonnen hätte.」と言っているように、お姫

様はくじ引きの景品なのである。もっとも、それを引き当てることは、庶民にとっては、出世と幸せを意味するのはもちろんのことである。

第6番目は『踊りぬいてぼろぼろになった靴 (Die zertanzten Schuhe)』(KHM 133)である。

むかし昔、王様があり、十二人の美しいお姫様がいた。お姫様の寝室には鍵がかけてあるにもかかわらず、朝にはお姫様の靴は踊りぬいてぼろぼろになっていた。誰にも訳がわからなかった。そこで、王様は「姫たちが夜中にどこで踊っているか見つけた者は、姫たちの一人を選んで妻とし、わしの亡き後は王になることとする。wers könnte ausfindig machen, wo sie in der Nacht tanzten, der sollte sich eine davon zur Frau wählen und nach seinem Tod König sein:」が、三日でできなければ命はない、という御触れを出した。

多くの人が挑戦し、命を失った。ある時、貧しい兵隊 (ein armer Soldat) がやってきた。兵隊が出会った老婆 (eine alte Frau) は、お姫様をもらうことは簡単だと言い、忠告をしてくれた。そして姿が見えなくなる外套 (ein Mäntelchen) をくれた。兵隊は、王様にお姫様をいただきたいと申し出た。(sich als Freier meldete) 兵隊がお姫様から出されたぶどう酒を飲んだふりをし、いびきをかくと、一番上のお姫様が自分のベッドをノックした。すると、それは地下に沈んだ。お姫様たちはその開いた所 (die Öffnung) から次々と下に降りていった。兵隊は外套を着て後からついて行った。そして途中にあった銀と金とダイヤモンドの木の枝を一本ずつ折り、証拠に取っておいた。先へ進むと、大きな川があり、十二人の王子が十二艘の小船 (Schifflein) に乗り、十二人のお姫様を待っていた。それから、川向こうの美しいお城へ行き、朝の三時まで踊り続けた。靴がぼろぼろになると、お姫様たちはお城へ帰って寝た。二晩目も、三晩目も同じであった。三晩目に兵隊は証拠として杯を一つ持って帰った。そして王様から踊っていた場所を尋ねられると、兵隊は「地下のお城です。in einem unterirdischen Schloß」と答え、証拠の品を四つ出して見せた。そこでお姫様たちも白状した。王様がどの娘が欲しいかと尋ねると、兵隊は「私はもう若くはありません。ですから、一番上のお姫様を下さい。‘ich bin nicht mehr jung, so gebt mir die älteste.’」と答えた。そしてその日の内に結婚式が挙げられ、王国を継ぐという約束もできた。「王子たちは、十二人のお姫様と舞踏をした夜と同じ日数だけまた呪いをかけられた。Aber die Prinzen wurden auf so viel Tage wieder verwünscht, als sie Nächte mit den zwölfen getanzt hatten.」

夜中にお姫様が舞踏をする秘密の場所は地下の美しいお城である。このお城も王子たちと同様に恐らく呪いをかけられているのであろう。こんな場所を探し当てることは、それもお姫様に気づかれずに探し当てることは、普通の地上の人間にとってはおよそ不可能であろう。兵隊にそれができたのは、異次元の世界の存在と思われる老婆からもらった、透明人間になれる外套があったからである。こういう難題を解決して、兵隊はお姫様をお嫁さんにももらったのだから、二人の結婚は難題解決結婚である。

兵隊は結婚相手のお姫様に愛情を抱いてはいない。それは、十二人のお姫様の中から一番上のお姫様を選んだときの理由でよくわかる。兵隊の場合、愛情というよりも、王様になることがねらいで、お姫様をもらうことはそのための手段であろう。老婆からどこへ行くと尋ねられた時、兵隊は冗談半分とはいえ「たぶん、お姫様方が踊って靴をぼろぼろにする場所を見つけて、王様になりたいのでしょ。‘ich hätte wohl Lust, ausfindig zu machen, wo die Königstochter ihre Schuhe vertanzten, und danach König zu werden.’」と答えているのがその一つの

証拠である。メルヘンの最後でも、結婚式の叙述と兵隊が王国を継ぐという叙述はあるが、結婚することへの喜びはない。お姫様の方も、兵隊に対して好意はもちろんないし、結婚する意志も感情も持っていない。それどころか、眠り薬で兵隊が簡単に眠ったと思った時には、馬鹿にしたようにさえ見える。そのことで兵隊の命が失われることになるのである。十二人のお姫様は皆美しいが、このメルヘンでは、美しさは何の役割も演じていない。父王は、相手が誰であれ、娘たちの秘密の舞踏の場所を突き止めた者に、十二人の娘のどれでもいいから、一人やると言っており、娘を人間扱いしていない。

第7番目は『グライフ鳥 (Der Vogel Greif)』(KHM 165) である。

むかし昔、王様があり、お姫様が一人あった。しかし、お姫様は不治の病にかかっていた。王様は、お姫様の病を治すりんごを持ってきた者に、お姫様をやり、国王にしてやるというお触れを出した。

これを知った百姓に三人の息子があった。長男がりんごを籠に入れて出かけた。長男が途中で会った小人に何が入っていると尋ねられ、「蛙の肢」と答えると、りんごは肢に変わっていた。長男はそれと知らずにお城へ持って行き、お城から追い出された。次男も同様な目にあった。

末の馬鹿のハンス (der dumme Hans) は、馬鹿にして反対する父親から粘土 (eme nidege Ton) をもらい、出かけて行った。ハンスは、途中で出くわした小人に何が入っているか尋ねられると、りんごだよ、と答えた。そしてお城へ着き、王様の前で籠を開けると、黄金色のりんご (goldgale Äpfel) に変わっていた。お姫様はそれを食べると、すぐ元気になった。王様は大変喜んだが、いざとなると、娘をやるのが嫌になった。

そこで、王様は水陸両用の船を造って持ってこなければだめだと言った。ハンスがそれを造っていると、例の小人が現れ、何を造っているか尋ねた。ハンスが水陸両用の船だよと答えると、実際にそれが出来上がっていた。ハンスがそれに乗ってお城へ行ったが、王様は首を縦に振らなかった。王様は今度は、朝から番まで兎百羽の番をしろ、一羽でもいなくなったらだめだ、と言った。すると、またあの小人が現れ、口笛を吹け (piff) ば逃げた兎が帰ってくるよ、と言った。小人の言った通りで、ハンスはこの課題も見事にやってのけた。しかし、王様はグライフ鳥の羽を一枚持ってこなければだめだ、と言った。ハンスはすぐに旅立った。途中で、城主に金庫の鍵のありかを、別のお城でお姫様の病気を治す方法を、そして川岸の男に川越しの交代の方法を尋ねられた。ハンスはグライフ鳥のすみかに到着し、おかみさんの言う通りにして、グライフ鳥の羽と三つの謎の答えをもらい、岐路についた。ハンスは、川岸の男には、川の真ん中で背負ったやつを下ろせと教え、病の治ったお姫様のお城では、黄金白銀などをもらい、別の城主からは金貨や牛、羊、山羊などをもらってお城へ着いた。それを見た王様は宝が欲しくなり、自ら出かけていき、川の中で川岸の男に沈められてしまった。「ハンスはお姫様と結婚し、王様になった Der Hans het do d' Tochter ghürotet und isch Chönig worde.」。

お姫様の不治の病を治すりんごを持ってくること、水陸両用の船を造ること、兎百羽の番をすること、グライフ鳥の羽を持ってくること、という4つの難題を解決し、ハンスはお姫様をお嫁さんにもらった。だから、二人の結婚は難題解決結婚である。しかしこのメルヘンでは、今までの難題解決結婚のメルヘンと違い、王様は、ハンスが最初の難題を解決した後に、約束を破っただけでなく、ハンスが最後の難題をやり遂げた後でも、お姫様をやるとは言っていない。王様は欲に目が眩み、川の中に沈められ、死んでしまった。それで、ハンスは誰の指図も

受けず、お姫様をもらい、王様になったのである。

第1の難題では、小人が勝手に、粘土をお姫様の病気を治すりんごに変えてくれた。第2の難題でも、水陸両用の船を造ったのは小人である。ハンスはそれをただ持って行っただけである。第3の難題でも、小人が口笛に不思議な力を与えてくれたため、ハンスはたいした努力もせず、課題を果たすことができた。第4の難題では、おかみさんがハンスの命を救ってくれ、グライフ鳥の羽を取る方法も教えてくれた。小人もおかみさんもグライフ鳥も異界の存在である。

このメルヘンでも、勝手気ままに振舞う、家父長的な王様が次々と自らの決定を覆し、事件を引き起こしていく。お姫様の意志はどの局面においてもまったく無視されている。また、お姫様の方にも、人間らしい感情や意思は見られない。例えば、お姫様はりんごを食べ不治の病が治り、父王とハンスのところへ駆けて行ったのに、喜びの言葉も、感謝の言葉もない。父王は大喜びしたのである。最後にハンスがお姫様をお嫁さんにし、王様になるが、この時もお姫様の意思や感情はまったくない。メルヘン全体を通して、お姫様の存在感はまことに希薄である。これでは、お姫様は、黄金や白銀、ダイヤモンドと同じく、高価な贈物でしかない。事実、このメルヘンでは、お姫様は難題解決の最高の褒美であり、お姫様との結婚は、最高の出世の（王様になる）ための手段である。ハンス自身、お姫様に対して愛情など抱いていない。ただ王様になりたいだけである。「そうすれば、お姫様と結婚して王様になれるんだ。und denn darf er die Königstochter heiraten und wäre König.」と言うハンスの言葉がそれを裏付けている。メルヘンの最後でも、ハンスが王様になったことは書かれているが、お姫様をもらった喜びや反応は一切書かれていない。二人の結婚生活についても、叙述がないので、幸か不幸か不明である。

第8番目は『あめふらし (Das Meerhäschen)』(KHM 191) である。

むかし昔、王女 (eine Königstochter) があった。この王女には、地上のものでも地下のものでも、目に見えぬものはなかった。高慢な (stolz) 王女は「私に見つからないように隠れることのできる者でなければ、私は夫にしない。es sollte niemand ihr Gemahl werden, der sich nicht so vor ihr verstecken könnte, daß es ihr unmöglich wäre, ihn zu finden.」という御触れを出した (bekanntmachen)。失敗した者は首をはねられ、さらしものにされた。さらし首が九十七もできた時、三人兄弟が現れ、王女に運試し (ihr Glück) を申し出た。石灰の穴 (Kalkloch) に潜った長男も、お城の地下室 (in den Keller des Schlosses) に隠れた次男もすぐに見つかり、首をはねられた。

末っ子は、三度の機会と一日の猶予をもらったが、いい考えが浮かばず、猟銃 (seine Büchse) を持って猟に出かけた。鴉を撃とうとすると、鴉が「撃たないで。恩に報いますから。'schieß nicht, ich will dir vergelten!」と言ったので、撃つのを止めた。次に湖の大きな魚に狙いを定めると「撃たないで。恩に報いますから。」と言ったので、撃つのを止めた。その次には、びっこの狐を撃ち、皮をはぎ取ろうとすると「逃がして下さい。恩に報いますから。」と言ったので、逃がしてやった。翌日末っ子は、鴉に「お前を生かしてやった。ich habe dich leben lassen,」、隠れ場所を教えろ、と言うと、鴉は卵の中に隠してくれた。しかし、十一階まで上がった王女に見つかった。次は魚に隠れ場所を教えろと言うと、魚は末っ子を飲み込み、湖の底に沈んだ。王女は見つけることができずあわてたが、十二階の窓からやっと見つけた。最後に、末っ子は狐にいい知恵をかせ、と言うと、狐は泉の中で、露天商兼動物商に化け、末っ子はあめふらしに化けた。商人は都へ行き、あめふらしを見世物にすると、多くの見物人に混

ざって、王女もやってきた。王女はあめふらしを買い、お城へ持って帰った。あめふらしは王女のお下げの中 (unter ihren Zopf) に入っていたので、王女は見つけることができなかった。あめふらしは、商人の所へ走って行き、泉の中で元の姿にかえった。王女はお城で彼を待ち、運命に服した (Die Königstochter fügte sich ihrem Schicksal.)。「結婚式が行われ、今や末っ子が国全体の王様、支配者になった。Die Hochzeit ward gefeiert, und er war jetzt der König und Herr des ganzen Reichs.」

千里眼の王女の中から隠れぬくという課題は、簡単そうに見えるが、すでに九十九人が挑戦して失敗し、鴉の卵の中に隠れても見つかるし、魚の腹の中に隠れて湖底に沈んでも見つかるのであるから、超難題と言える。末っ子は狐の助けで、あめふらしに変身し、難題を解決して結婚したのであるから、二人の結婚は難題解決結婚である。この難題解決にあたって、鴉、魚、狐という異界の動物たちが活躍する。末っ子は事実上何もしない。もっとも、鴉と魚の場合には失敗するが、最後はまったく狐の力で、末っ子は難題解決に成功する。末っ子は狐の助言通りに振舞っただけである。あめふらしへの変身も狐がいなければ不可能である。

末っ子の王女に対する気持ちは、話全体を通じて描かれておらず、わからない。しかし、王女に好意を抱いているようには思われない。王女に挑戦した動機を見ても、王女に憧れている形跡はない。挑戦の動機は、「運試し」であった。つまり、王女をお嫁さんにもらうというより、王女のお婿さんになること、王様になることである。最後まで、「結婚式が行われ、…王様、支配者になった。」とあり、結婚への喜びはなく、王様になったことに話の力点がある。王女の方も、末っ子に何の好意も抱いていない。むしろ、末っ子の首をも取ってやろうと意気込み、それに喜びを見出している。だから、末っ子を見つけることができなかった時、王女は怒りをぶちまける。そんな気持ちを抱きながらも、約束は約束である。自分が敗北すると、王女は「運命に服し」結婚に応じた。ただ、末っ子が自分の千里眼をも上回る能力を持っていると考えると、「夫を尊敬しました。sie hatte Achtung vor ihm,」と態度は変わるが、これは愛情とは別の感情である。

このメルヘンにはいくつかの特徴がある。まず第1に、王様がないことである。メルヘンの始まりがいきなり王女となっている。普通は、むかし昔王様がありました。王様には一人娘(王女)がありました、のような書き出しになる。したがって、このメルヘンには家父の権威や力どころか、その存在すらない。それゆえ、第2に、このメルヘンでは、王女の意志や考えが、自らの結婚も含め、何の妨げもなく貫いていく。お触れも王女自身が出している。「王女は高慢で、誰であれ人に従う意志がなく、自分一人で支配しようとした。Weil sie aber stolz war, sich niemand unterwerfen wollte und die Herrschaft allein behalten,」とあるが、まさにその通りである。王女となっているが、実際は女王のようである。第3に、王女が「これで私は生涯独身でいられる。‘ich werde nun für mein Lebtag frei bleiben.’」と考えていた、とあるように、この王女は独身願望を持っている。これは、きわめて稀、まったくの例外と言ってよい。王女という最高の身分の女性が、グリムの時代に、あるいはそれ以前に、メルヘンの世界とはいえ、自ら積極的に独身を望んでいるのである。余儀なくされて独身のままであったり、夫に先立たれて一人であったり、懲罰として結婚を許してもらえなかったりするのとは違う。子を作らない女性は女性ともみなされない時代にあって、女性が自分の生き方として積極的に独身を選択し、望んでいるのだ。

以上の難題解決結婚の話の特徴を表にすると、次のようになる。

グリム童話													
	難題	難題を課す人	難題に挑む主人公			褒美として与えられる人			父王の態度	結婚生活	難題を解決する異界の存在や贈物	難題解決で主人公は行動するかしない	
			地位身分	動機	結婚への意志と感情	地位身分	結婚への意志と感情	容姿と結婚の関係					
類型 1	黄金の鳥 57	黄金の鳥・馬、黄金の姫を連れてくる、8日以内に山を取り除く	王様	王子	死への恐怖	無し	お姫様	ほとんど無し(父がした約束を守る意志はある)	美しいが、無関係	家父長的	幸福	狐	しない×
	二人の王様の子供 113	3日寝ずの番、ガラスの斧で森の木を1日で全部伐採、ガラスのシャベルで1日で池のかえぼり、ガラスの斧で1日で築城	王様	王子	死への恐怖	愛情が芽生える	お姫様	有る	不明	家父長的	不明	クリストッフェルの石像と地妖	しない×
	六人の家来 134	紅海の底の指輪を取る、牛300頭を食べる魔法の中で徹夜する燃え盛る薪の山に座る	女王	王子	お姫様の美しさ	有る	お姫様	無し(結婚に反対する意志と感情は強い)焼殺を謀る	美しい関係有り	不明(父親登場せず)	不明	腹男、耳男、のっぽ男、眼光輝男、寒がり男、千里眼男	しない×
類型 2	三人の糸紡ぎ女 14	3部屋一杯の麻を紡ぐ	女王	貧乏な娘	母親の見栄で、否応なく	叙述は無いが、結婚願望は有りそう	王子	微かだが有りそう	無関係(王子で無関係)	不明(父親登場せず)	不明	大きく平らな足、唇、親指の3人の女	しない×
	がたがたの竹馬小僧 55	部屋一杯の薬を1晩で金の糸に紡ぐ	王様	粉屋の娘	死への恐怖	無し	王様	意志はあるが、愛情は無い(金目当て)	無関係	登場せず	不明	小人	しない×
類型 3	白い蛇 17	海底の指輪を拾う、10袋の黍を拾う、命の木のリングを取る	王様	王様の召使い	お姫様の美しさ	有る	お姫様	有る(結婚反対の強い意志有り)	美しい関係有り	家父長的	幸福	魚、蟻、鴉	しない×
	二人兄弟 60	竜退治	王様	貧乏な狩人の弟	冒険心	無いに等しい	お姫様	有る愛情ではない	不明	家父長的	幸福	兎、狐、狼、熊、ライオン、盃、剣	する○
	黄金の鷲 64	地下室一杯のぶどう酒を飲む、山のようなパンを食べる、水陸両用の舟を造る	王様	3兄弟の末の馬鹿太郎	王様になること	結婚への意志はあるが、好意はない	お姫様	無し	不明	家父長的	不明(男は幸福)	小人黄金の鷲	しない×
	地妖 91	竜の見張る地下からお姫様を救う	王様	末の馬鹿のハンズ(狩人)	王様になること	結婚への意志はあるが、3姫の内誰でもいい	お姫様	無し	美しいが特定の姫では微妙	家父長的	不明	地妖、山刀、鈴	する○
	二人の旅人 107	池の底から金の冠を取る、蜜蝶で城を作る、水の出ない中庭に噴水を作る、お后に王子を授ける	王様	仕立屋	死への恐怖	無し	お姫様	無し	美しいが、無関係	家父長的	不明	鴨、蜜蜂、馬、こうのとり	しない×
	踊りぬいてぼろぼろになった靴 133	お姫様の秘密の舞踏場所(地下の城)を突き止める	王様	兵隊	王様になること(冗談半分)	結婚への意志はあるが、どの姫でもいい、好意もない	お姫様	無し	美しいが、無関係	家父長的	不明	老婆、マント	する○
	グライフ鳥 165	不治の病を治す果物を探す、水陸両用の舟を造る、兎100羽を逃さず見張る、グライフ鳥の羽を取る	王様	3兄弟の末の馬鹿のハンズ(百姓)	王様になること	結婚への意志はあるが、好意はない	お姫様	無し	不明	家父長的	不明	小人、おかみさん	しないに等しい×
	あめふらし 191	姫の千里眼から隠れとおす	王女	3兄弟の末っ子	王様になること	結婚への意志はあるが、好意はない(運試し)	お姫様	無し(結婚に反対する意志と感情は強い)強烈な反感	不明	不明(父登場せず)	不明	狐	しない×

第4章 難題解決結婚の特徴

この表をよく見ると、難題解決結婚の特徴がいくつか浮かび上がってくる。

第1に、難題解決結婚のメルヘンでは、王様が登場する。例外は『六人の家来』と『三人の糸紡ぎ女』と『あめふらし』の3話である。

第2に、その王様が難題を課す。王様が登場しない『六人の家来』と『三人の糸紡ぎ女』では、女王が、『あめふらし』では、王女が難題を出す。

第3に、難題解決結婚のメルヘンでは、お姫様も登場する。

第4に、そのお姫様が難題を解決した者に妻として与えられる。

第5に、お姫様は難題を解いたことへの褒美、褒賞である。しかし、最高の褒美である。

第3、第4、第5の例外は『三人の糸紡ぎ女』と『がたがたの竹馬小僧』である。この2つのメルヘンでは、難題に挑むのは男ではなく、女である。しかし、それゆえに、これらでは、他の難題解決結婚の話と男女の役割が逆になっているだけで、事柄の本質からすると、例外扱いする必要はないように思われる。つまり、前者では、王子が登場し、王子が難題を解決した女に夫として与えられる。王子は、貧乏な娘にとっては、最高の褒美である。王子がお姫様の役割を演じているのである。後者では、王様が未婚の筈で、王子の役割をも果たしている。つまり、難題を解決した粉屋の娘に王様が夫として与えられるのである。ただ、主人公が女性であり、相手が王様で、しかもその王様が難題を課す当事者でもあるので、王様が夫として与えられたとか、王様をもらったとかいう、女性主体の表現ではなく、「お前をわしの妻にしてやる。」「王様のお后になった」と、女性が従属的立場にある表現となっているだけである。王様（の后になること）は、粉屋の娘にとっては、最高の褒美である。だから、このメルヘンでは、王様は、難題を課し、かつ自分が難題解決の褒美となり、夫として与えられるという、一人二役を演じている。

このような難題解決結婚の話の特徴を見てくると、第1の王様が登場する、という特徴の例外と思われた『六人の家来』と『三人の糸紡ぎ女』では、女王が、『あめふらし』では、王女が登場し、難題を課し、難題解決の褒美として、お姫様を妻としてやったり、王子を夫としてやったり、王女自らを妻としてやったりと、王様とまったく同じ役割を演じていることがわかる。それゆえ、王様が登場しないという外面的な特徴は、王様に代わる登場人物の役割、機能からすると、例外とはみなし難い。つまり、難題解決結婚の話では、第1、第2の特徴については、最高権力者、最高位の者（王様が10話、女王が2話、王女が1話）が登場し、難題を課す、というように定式化できるのである。

第6に、お姫様が登場する限り、お姫様は、難題に挑む者がどんな人物であろうと、つまり、地位・身分が高かろうが低かろうが、氏素性がどうであれ、またその者がとても嫌な人物であっても、難題を解決しさえすれば、最高権力者（王様）によって、その者と結婚させられる、否、難題解決の褒美として与えられる。いわば、お姫様は、結婚への意志も感情もなく、人格さえもない、単なるモノとして扱われる。ただし、この定式化には慎重な配慮が必要である。

『三人の糸紡ぎ女』と『がたがたの竹馬小僧』には、お姫様が登場しないので、例外とは言えない。もっとも、前者では、王子がお姫様のようにモノ扱いされている。ただし、王子が母のお后様からモノ扱いされているのは事実であるが、王子には結婚への意思も糸紡ぎ女への好意もある。後者では、モノ扱いされるはずの王様が、同時にモノ扱いする主体であるので、事柄は単純

ではない。つまり、王様が自らを難題解決の褒美として粉屋の娘に与えるのである。娘に夫（自分）を与える主体としての王様には、意志も人格もある。金目当ての結婚をする主体として。しかし、夫として与えられる客体としての王様は、黄金と取引され、交換されるモノである。

明確な例外は『二人の王様の子供』と『あめふらし』である。前者では、お姫様と王子は、王子が難題を解決する途中で、お互いに恋愛感情を抱き、父王に逆らって駆け落ちする。このような大胆な行動に走るほど、彼らには結婚への強い意志と激しい感情がある。お姫様が父王によってモノ扱いされていることに変わりはないが、お姫様には強い意志と感情、自立した人格があり、実際の行動で、単なるモノでないことをはっきりと示している。後者のお姫様は、『がたがたの竹馬小僧』の王様と同じで、自らが難題を出し、難題を解決した者を夫にしてやるというのである。このように、このお姫様は、自分の結婚相手を自分で決める、自立した意志と感情の持ち主である。しかし、このお姫様にはもっと強い意志と感情がある。珍しいことに、お姫様は独身願望を抱いており、難題に挑み、自分の結婚相手となるかもしれない者の首を取ることに執念を燃やしているのである。この激しく強い意志は、単なる意志にとどまらない。九十九人もの首を取って、さらし首にして喜んでいるように、お姫様はその意志を実行に移している。そして百人目の挑戦者に敗北すると、お姫様は我慢がならず、激怒する。お姫様には異常で激しい感情がある。だから、お姫様は意志も感情もない単なるモノではないし、モノ扱いもされていない。しかし、それは、難題を課す主体としてのお姫様の一面である。約束どおり、自分の千里眼から隠れ通すという難題を解決した末っ子に嫁がざるを得なかったお姫様は、その結婚相手に対して何の愛情も好意も抱いていないし、結婚する意志もない。むしろ、結婚することが嫌で嫌でたまらないのである。敗北して結婚せざるを得なくなった時に、腹を立てて、お城全体が震えるほどに窓を叩き割ったことに、それがよく表れている。こういう相手に自分が（自分によって）妻として与えられるのであるから、非常に逆説的ではあるが、お姫様は自分で自分をモノ扱いしていると言えよう。単なるモノではない主体としてのお姫様は、同時にモノ扱いされる客体でもあるのである。

『白い蛇』のお姫様もこのお姫様と若干似ている。「お姫様をもらいたい者は、難題をやり遂げねばならない」という御触れが出ているが、海辺で難題を直接課したのは王様であり、その難題をやり遂げた若者が大喜びで王様の所に行き、「約束の褒美を王様からいただけると期待に胸をふくらませていた」のであるから、御触れを出したのも王様であることは明らかである。このように、お姫様は難題解決の「褒美 (Lohn)」であり、父王から完全にモノ扱いされている。ところが、このメルヘンでは、その後、突如王様が後景に退く。代わって、お姫様が前面に出てくる。「誇り高い」お姫様は、若者が難題を解決したにもかかわらず、約束を守らず、若者が卑しい身分であることを軽蔑し、さらに難題を二つも出して、若者との結婚を阻止しようとする。このように、お姫様は単なるモノではなく、激しい感情と強い意志を持っている。しかし、若者が難題を二つともやり遂げると、結婚を逃れる口実がなくなり、約束通り、お姫様は嫌な相手と結婚せざるを得なくなる。この面では、『あめふらし』のお姫様と同じである。お姫様自らが自立した判断力と権限を持って、王様のように振舞っている点も、また嫌な相手に自らをくれてやるというように、自らをモノ扱いしている点も同じである。後者は結婚相手が自分の千里眼という能力を上回ったことで、相手を尊敬するようになり、前者はりんごを食べたことで、突如愛情が芽生えたという点では異なるが。ただし、りんごを食べて愛情が芽生えたという唐突で不自然な設定はグリムが途中で書き変えたものではある。

次に『六人の家来』のお姫様は、母親が人の命を取るためのおとり（結婚したい者は難題を解け、解けない者は命をもらう）であり、完全にモノ扱いされている。しかし、このお姫様は最後の方で、強烈な意志と激しい感情を見せる。好きでもない王子が難題をことごとく解決し、自分の夫となることになった時、お姫様は、母親にけしかけられたとはいえ、突如「自分の好みで夫を選ぶ」ことを当然と思ったのか、結婚を阻止するために、王子を焼き殺そうとさえする。ところが、この激しい感情もどこへいったのか、最後には、お姫様は、自らの意志と感情に反して、好きでもない王子と結婚する。

最後に『踊りぬいてぼろぼろになった靴』の一番上のお姫様は、十二人の姫たちの秘密の舞踏の場所を見つけた者は「姫たちの一人を選んで妻とし」てよいという父王の御触れ通りに、結婚させられる。お姫様は、意志も感情も人格もないモノとして扱われている。にもかかわらず、彼女には人間としての感情がある。もちろん結婚相手の兵隊への好意ではない。逆である。お姫様は、兵隊が難題解決に失敗したと思い、相手が死ぬことになるのに、勝ち誇ったように笑う。兵隊と結婚したくないという感情の露骨な表現である。それどころか、十二人のお姫様には、*jeder Prinz tanzte mit seiner Liebsten*; とあるように —— 厳密に言うと、王子の側から見ての恋人ではあるが —— それぞれ恋人の王子がいるのである。それにもかかわらず、お姫様は、父王に逆らうことなく、まるで贈物のように、父王の言うままに兵隊のお嫁さんになる。

お姫様たちの意志と感情を結婚したいと思う意志と感情だけに限定して論を進めると、お姫様たちは、主として王様から、意志も感情も人格も無視され、難題解決の褒美として、難題を解決した者に与えられ、モノ扱いされている。お姫様の登場しない2話を除くと、11話中8話がそうである。例外は『二人の王様の子供』と『あめふらし』と『白い蛇』であるが、厳密な意味では、前者の2話である。しかし、王様からモノ扱いされているにもかかわらず、お姫様たちの中には、王様の約束した結婚に反対したりして、強い意志や激しい感情を示す人間的なお姫様も多い。例外として挙げた3話の他、『六人の家来』、『踊りぬいてぼろぼろになった靴』、『黄金の鳥』、『二人兄弟』のお姫様たちがそうである。『黄金の鳥』のお姫様は、夫となるべき王子が不当に殺されたと思って悲しんだり、悪人と結婚せざるを得ない運命を悔やんだり、父王の決定した正当な結婚が可能となって喜んだりする。人間らしい感情もあるし、父王の決めた結婚の約束を忠実に守ろうとする意志もある。『二人兄弟』のお姫様には、竜の生贄になるところを救われて喜ぶ感情や父王の決めた結婚を正当なものとして忠実に実行しようとする意志がある。意志も感情も人格もない完全なモノ、単なる褒美となっているお姫様は4人だけである。それゆえ、難題を解決した者に褒美としてやるという難題解決結婚の設定にもかかわらず、グリム童話には、褒美となるお姫様（あるいは王子）に強い自我の覚醒があるのが特徴であると言える。

第7に、難題を課す王様はすべて家父長的に振舞う。例外は『がたがたの竹馬小僧』だけである。このメルヘンは、粉屋の娘が難題を解いたら、王様が自分の妻にしてやるという話だからである。そもそもこの話ではお姫様自体登場しない。『六人の家来』と『三人の糸紡ぎ女』では、難題を課すのは母の女王で、『あめふらし』では、王女自身であり、そもそも父王は登場しないので、例外とはいえない。しかし、父王は登場しないとはいえ、前者の2話に登場する女王は、他のメルヘンの王様とまったく同じように、難題を課し、難題を解決した者に姫や王子をやると言い、家父長的に振舞っている。

第8に、難題解決の褒美となるお姫様が美しいのは、お姫様の登場しない2話を省いた計11話の中で、6話である。この数は一見すると多いように見え、難題解決結婚では、美しいお

姫様の獲得を目指して、命がけで難題に挑むように思われる。しかし、意外なことに、そういう話は、『六人の家来』と『白い蛇』の2話だけである。『地妖』のハンスの難題挑戦の動機にお姫様の美しさがないとは言えない。しかし、彼の最大の動機は、国王になることである。お姫様をもらうことはそのための手段である。その証拠に、ハンスは、三人のお姫様の内、お嫁さんにもらうのは誰でもいいと思っているのである。とにかく、お姫様をもらえれば、国王になれるからである。このように、お姫様の美しさは、難題に挑む動機となったり、結婚と結びついたりすることは稀である。これは、ほぼ例外なく男性が女性の美しさに惚れるグリム童話の恋愛結婚との大きな相違である。

では、難題に挑む、というよりも難題に取り組む動機は何であろうか。国王になるという出世欲が5話、難題を解かなければ殺されるという、死への恐怖が4話、美しいお姫様をもらうことが2話であり、残りが、恐れを知らない冒険心が1話と、否応なくが1話である。

第9に、難題に取り組む動機とも関係するが、難題に取り組んだ者が結婚相手にはっきりと好意を抱いているのは、『六人の家来』と『白い蛇』と『二人の王様の子供』の3話だけである。反対に、結婚相手に対して、好意を抱いていないのは、『黄金の鳥』、『三人の糸紡ぎ女』、『がたがたの竹馬小僧』、『二人兄弟』、『黄金のがちょう』、『地妖』、『二人の旅人』、『踊りぬいてぼろぼろになった靴』、『グライフ鳥』、『あめふらし』と10話もある。その内、好意どころか何の感情も抱かず、結婚の意志もないのに結婚している話が4話もある。これは、難題解決結婚では、難題を次々と解決すること、およそ地上の人間には解決困難と思われる難題をやり遂げて、最高の褒美（13話中11話と、ほとんどすべてがお姫様）をもらい、最高の出世をする（王様になる）ことが主たるストーリーで、結婚当事者間の感情が脇へやられた結果であろう。

第10に、難題解決結婚の結婚生活についてであるが、幸か不幸か不明な話が10話で、幸福なのは3話しかない。これは、難題を解決することが主眼で、難題を解決した時点で、厳密にはお姫様（褒美）をもらった時点で、話が事実上終わっているからであろう。つまり、結婚は難題解決の結果、終局なのである。恋愛結婚であれば、当事者間の愛情が問題となり、結婚後の生活にも関心が行く。ちなみにグリム童話の恋愛結婚では、不幸な結婚生活はない。難題解決結婚では、すでに見てきたように、当事者間に愛情や好意はほとんどの場合ないので、結婚後の生活が不明であっても、話としては十分なのである。

以上の特徴からして、グリム童話の難題解決結婚の一般的定式化が可能となる。難題解決結婚とは、王様（ないし女王、王女）が、地上の人間には解決することがおよそ不可能なような難題を出し、難題を解決したら、褒美としてお姫様を嫁にやる（嫁にしてやる、あるいは王子を夫にやる）という約束に基づく結婚である。難題は、地球上の人間には解決が困難か、不可能なので、異次元の世界の存在や異次元の世界からの贈物が登場し、難題解決に決定的な力を発揮する。例外はない。難題が困難極まるものなので、解決の褒美としてのお姫様は、解決した者にとっては、最高、最大の褒美である。ところが、お姫様の方は、多くの場合、結婚をしたいという意志も、結婚相手への愛情や好意もないし、それどころか、相手が嫌で嫌でたまらないのに、父王の約束どおり、結婚させられることになる。だから、父王が登場する限り、父王の態度はすべて家父長的である。父王は、娘のお姫様を、結婚への意志も感情も人格もない、単なるモノとしてしか扱っていない。しかし、モノ扱いされたお姫様には、父王の約束した結婚に抗う強い意志や激しい感情がある場合が多い。グリム童話の場合、恋愛結婚と同様、ここにも女性の強い自我の覚醒が見られる。

難題解決結婚に類型2が2話しかない最も大きな理由は、地上の人間が解決することが不可能なような課題をやり遂げたことの最高、最大の褒美としては、お姫様をおいて外にないからであろう。つまり、お姫様をもらうことはそれだけで大きな褒美であるが、それ以上に、それは将来王様になるということの意味するからである。平凡な庶民が王様になる、出世の頂点に立つ、というのはメルヘンとしては最高の筋立てであろう。類型3が8話もあるのはそのためであろう。また、難題解決は、生命の危険を伴う冒険、武勲、手柄であることが多いが、これは男性向きだったのである。女性の場合、類型2に見られるように、麻を紡ぐこと、藁を紡いで金の糸にすることが難題である。紡ぐというのは当時の女性の仕事であったが、それほどの冒険ではない。また、歴史的な家の利害からして、難題を解決した女性に、王子を褒美として婿にやる、ということの非現実性もあろう。『がたがたの竹馬小僧』のように、王様が粉屋の娘に「わしの妻にしてやる」という方がまだしも（昔話としても）現実的であろう。

そうすると、難題解決結婚が類型4にまったく見られないことはよくわかる。生命の危険のある難題に取り組んで、褒美が庶民の娘では不満が残るし、話としても魅力に欠ける。また、難題に取り組む動機としても、庶民の娘がもらえるというのでは非常に弱いし、何よりもそれでは出世がない。それから、現実の世界と同じように、メルヘンの世界でも、男性が主体であったので、庶民の娘ならば、娘をもらえる、というのではなく、娘をもらってやる、娘と結婚してやる、娘が欲しい、というのが普通であるから、類型4の難題解決結婚は極めて不自然なのである。お姫様であれば、いくら男性主体だったとはいえ、庶民の男性が、お姫様をもらってやるとか、お姫様と結婚してやるという訳にはいかない。庶民の男性にとって、お姫様をもらうということは、王様にまで成り上がるということでもあり、困難極まりない。それゆえ、困難極まりない難題を解決した褒美としては、お姫様がふさわしい、というよりもお姫様をおいて外にはありえないのである。

『日本の昔ばなし』に難題解決結婚がまったくないのは、理由が良くわからない。殿様を頂点とする日本の堅固な身分制度の下では、女性が殿様家に入って出世することはありえても、男性が殿様家に入ってお姫様をもらって殿様にまで出世するということは昔話としても非現実的だったのであるか。これに対し、西欧は、17世紀に清教徒革命や18世紀末にはフランス革命を経験し、市民と王侯との距離が縮まり、庶民が空想の中では王侯と結婚することも可能になったのであろうか。あるいは、家の利害と家の支配が非常に強かった日本では、お姫様は政略結婚の道具にはなりえても、難題解決の褒美として庶民にくれてやるということは、昔話という空想の世界でも成り立ちにくかったのであろうか。今後の課題である。ただ一つだけ確実に言えることは、『日本の昔ばなし』では、一般に庶民の男性と殿様家のお姫様との結婚の話はほとんどなく、庶民の男性と長者の娘との結婚の話が多い。例えば、類型3の庶民の男性とお姫様の結婚は、『日本の昔ばなし』には、15話、17組あるが、その内、殿様家のお姫様との結婚は2組しかない。残りの15組はすべて長者の娘との結婚である。だから、『日本の昔ばなし』では、庶民の男性がお嫁さんにももらえる最高のものは、せいぜいのところ長者の娘なのである。したがって、貧乏な庶民が出世するといっても、せいぜい長者になることなのである。難題解決結婚もこのことと無関係ではありえない。この事実を超え出るものではない。つまり、この地上の者には解決することができないような難題を解決したことへの褒美、対価は、それにふさわしい最高の物でなければならないが、それは殿様（西欧では王様）のお姫様をおいて他にないのである。長者の娘では不十分なのである。